
機動戦士ガンダム record of VALHALLA

暇零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム record of VALHALLA

【コード】

N6889H

【作者名】

暇零

【あらすじ】

U.C.0094年、主人公のアレックス・レイバードは18歳のテストパイロット。初めての配属先は、『普通の』試験部隊とは少し違う……？ 『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』と『機動戦士ガンダムUC』の空白期、その裏で何が起きていたか。妄想多分ではありませんが、精一杯書いていきたいと思えます。また、一般に公式設定と呼ばれている物にかなり依存しながら書いているので、その手の知識があれば楽しめたり突っ込みたりすると思えます。

第1話：着任

U・C・0094初夏、ルナツー宙域。軍内のみならず、コロニーの運営にも広く使われているグリニツジ標準時が、14時00分を示そうとしていた。

漆黒の宇宙には、鮮やかな紅に染め抜かれた戦艦が1隻。その周りで、慌ただしい動きがあった。今日付けで紅の戦艦 【アイリツシュ改級戦艦・アルバトロス】に配属となる士官を乗せたランチが、哨戒中のMSのレーダーに捕捉されたからだ。

ミノフスキー粒子が微量ながらも散布されている状況下、たかがMSのレーダーに映るような距離では、すぐにも接近されてしまうからだ。哨戒中のMSは、ルナツー所属の【ジム?】。という事は、ランチはその機から見れば、遠くても11km弱という、宇宙空間では直近と言っても差し支えないような地点にいる事になる。

【アルバトロス】周辺のMS こちらはルナツーとは対照的に、そのほぼ全てが【ジェガン】で構成されている。 がランチの航路を空けようと姿勢制御用バーニアを閃かせる間に、当のランチは既に【アルバトロス】のレーダー圏内に入っていた。 【アルバトロス】が艦体後部のデッキから着艦するようにガイドビーコンを照らすと、小さなランチはずしらずと紅の巨軀に近付いていった。

「アレックス・レイバード少尉、入ります」

「聞いている、入りたまえ少尉」

【アルバトロス】の艦長室は執務室のみと、同時期の艦艇に比べてやや手狭な雰囲気だった。その空間の壁際を、マホガニー製とおぼしきデスクが占領している。

「ようこそ【アルバトロス】へ。私が艦長のウィリー・ノーマン中佐だ」

豊かな口髭を蓄えた中年男が、アレックスを迎えた。

「で、少尉は今日からこのヴァルハラ隊の一員な訳だが」

「ヴァルハラ……？」

聞き慣れない単語に首を傾げ、辞令をポケットから出そうとしたアレックスを、ノーマンは笑った。

「地球連邦軍第二軌道艦隊所属試作MS運用戦術機動試験部隊。長ったらしくて鬱陶しいだろうが。上にも許可はとつてある」

そういうものか、とアレックスは自分を納得させる。確かに歴史を遡ってみれば、地球連邦宇宙軍ティアンム艦隊第13独立戦隊という名称よりも、その艦隊構成から付けられた俗称である『ホワイトベース隊』の方が世間一般的に知られており、連邦軍士官とジオン公国軍パイロットとのロマンスが有名になった『コジマ大隊』にしても、正式には地球連邦陸軍極東方面軍所属機械化混成大隊となる。

「さて、一応ヴァルハラ隊としては原則として本艦【アルバトロス】と、たまに随伴艦が着く。つまり単艦運用の部隊だ。戦力を見ると数こそ少ないが、配備されている機体のスペックは【ジェガン】より上。パイロットが使いこなせれば、質の面で数の少なさをカバーしきれるはずだ」

確かに、アレックス自身がこの目で見慣れないMSをランチの窓から確認している。【ジェガン】に混じるようにして警戒に当たっていた機体は、RGM系統の特徴を色濃く受け継ぎながら、一部ガンダムタイプMSの要素も取り入れられているように見えた。

「君が18歳という若年で士官となった動機は不明だが、そこは後々聞くとしよう。取り敢えずまずはMSハンガーにいるはずの他のパイロット達に、着任の挨拶をして来い。人間何をするにも、仲間と慣れが肝心だ」

「了解！」

その命令は、初めての物としては妥当な所だろう。ノーマンの言葉に納得しながらアレックスはきちんと敬礼を返し、艦長室を後にするのだった。

第2話：再会と機体

【アルバトロス】中央ブロックに位置する艦長室から、アレックスは艦体前部のMSハンガーへと向かっていた。しかし、目下のところ彼の胸中を占めていたのは、先輩パイロット達がいかなる者達であるか、という事ではなかった。

「俺のMS、どんなモノなんだろうなあ……」

辞令には『新型MSの試験』とあるだけで、機種はおるか開発コンセプトの概要すら載っていないかったのだ。通常のパイロットですら新しい自機が支給される、という話には興味津津なのだから、見たこともない新型MSを充てられるテストパイロットにとって、MS支給の話は艦長命令と同じくらい重要なものだ。しかも、アレックス自身己にMSが割り当てられるのは初めて。まだ士官学校を卒業してからそう間があるわけではない。その為か、無重力下で艦内を移動する為のリフトグリップを握るアレックスの手は、知らず力がこもっていた。

しかし、その無意識な行動が間違이었다。通常、リフトグリップは強く握れば速度が上がるような仕組みになっている。緊張感と期待で力の入った手は、リフトグリップを最高速にまで加速させていた。勿論、そんな速度では急に止まれたものではない。アレックスは曲がり角から顔を出して来た人と、結構な勢いでぶつかってしまった。

「きゃっ!?!」

「うわ、すみません！ 怪我ないですか!?!」

いてて……とうづくまって頭を抑えていたのは、若い女性だった。襟にある階級章を見るからには、中尉である。

「ホントすみません、以後気をつけます……」

シユンとするアレックスに、女性士官は笑いながら手を振り、アレックスを慰めるように答える。

「いいのよそんな事くらい。それより、この艦に新しいテストパイロットが……」

そこまで言つて、女性は急に口を閉じ、アレックスの顔を穴が開く程に見つめる。

「……？」

不思議に思い、アレックスは相手を見る。そしてその瞬間、互いは相手が誰であるかを理解した。

「アネシス先輩ですか!？」

「アレックス君なの!？」

女性士官　アネシス・フラメル中尉は、アレックスがまだ士官学校にいた時の1期上の先輩だ。MSパイロット適性においては、記録更新を成し遂げ首席で卒業したほどの腕前であり、女傑と言うには今一歩及ばないものの、学内ではかなりの有名人だった。一方のアレックスも、記録更新とまではいかないものの、卒業時には同期の者達の中でも両手の指の本数に入れる程度の技量は持っている。お互いに戦闘パターンが酷似していたので、シミュレーションの結果を参考にするようになり、そこから次第に接点を持つようになっていたのだ。

アレックスはアネシスに艦内の案内をされながら、MSハンガーへと足を運んでいた。

「しっかし、アレックス君が　あ、アレックス少尉って言った方がいいのかな　テストパイロットだなんてねえ。その腕なら、八艦隊勤務辺りは狙えたのに」

「君、でいいですよ中尉。それを言うなら、中尉こそロンド・ベル隊に食い込めるんじゃないですか？」

前を進んでいたアネシスが、突然アレックスの方へ振り返る。ぶつかりそうになり、慌てて止まるアレックスに、アネシスは不機嫌そうに言った。

「中尉って言うの止めてよ、1つ年上の友達でしょ？」

「そ、そうですね。あはは……」

実はアレックス、アネシスに密かに恋心を抱いていた。そのいっそ豪快とも言える快活な性格とボーイッシュで整った容姿に、士官学校で一目惚れしたのだが、長い間切り出せずに今に至る。そしてそれに気付かぬアネシスは、アレックスを1つ年下の親友として見ていた。

2人が士官学校時代の思い出話にふけっている間に、いつの間にかMSハンガーに着いていた。リフトグリップを離し、慣性に身を任せた2人が飛び込むと、ちょうどさつき搬入されたばかりの新型MS　アレックスの乗機となるものだ　のパッケージング処理を剥がそうとしているところだった。

既に上半身は露わになっており、その容貌を確認する事が出来る。直線を主体に構成された各部装甲に胸部ダクト、肩部姿勢制御用バーニアと、連邦軍の現在標準的となっているMSの特徴は一通り備えていたが、アレックスの目を奪ったのはそれだけではなかった。バックパックには長大な2枚の航空機のようなウイングバインダーと見るからに強大な推力を生み出すであろう大型のスラスタ、肩口に突き出たビームサーベルのグリップがあった。何よりも目を引いたのは、その機体の顔だった。額には大小合わせて4本の無段方位型ブレードアンテナを持ち、人間を模したデュアルアイに鋭角的な『顎』を備えたそれは

「ガンダム……なのか？」

第3話：蒼いガンダムと敵の予感

その機体は、アレックスの言葉通り、ガンダムタイプMSだった。正確に言うなれば、鋭角的に成形された、所謂『Z顎』が特徴的な【Zガンダム】の系列機だ。元祖たる機体は既に7年前の物だが、しかしそれを今の時代に運用したとしても十分に通用するであろう事から、この目の前にあるガンダムのポテンシャルの高さを伺い知る事が出来る。

「スツゴいわねえ、これ……」

「はい、着任早々ガンダムだなんて……」

アネシスの感嘆に、アレックスは茫然と応える事しか出来なかった。

無重力状態のハンガーで、名も知らぬガンダムの前に浮く二人に、横から声をかける者がいた。

「お気に召しました？」

声の主は、これまた若い女性。蒼い機体の前に、【アルバトロス】の艦色と似ている紅い髪がよく映える。

どうやら、このガンダムの専属メカニックらしい。アレックスは、口を開いた。

「ええ、このような機体が自分の乗機だなんて、パイロット冥利につきるっつてものです。……あの、あなたは？」

紅い髪の女性は、少し首を傾げながら微笑んで応えた。

「私？私はこの【RGZ-93 リズイクス】の専属メカニック。官姓名は、ジェーン・アイギス技術中尉。よろしくね」

技術中尉ということは准尉待遇官か、と頭に走らせ、アレックスは差し出された手を握った。

「よろしく、アイギスさん」

「こちらこそ、アレックス少尉。あと、ジェーンでいいです」

二人の空気になんだか不機嫌になり、アネシスは自機 【RG

M-92B アトラスト】、ランチからアレックスが見た、こちらも新型MSになる の方に体を流した。その時。

『総員に告ぐ！ これより本艦は、『ルナツー』に寄港する。MS全機出撃、対空監視！』

それまで緩やかな空気が流れていたMSハンガーは、艦内放送が終わると同時に、修羅場と化した。

「おらどけ、【アトラスト】2番機にシールド回すぞ！」

「クレーン邪魔だ！ さっさと収納 ああ、やっぱついでにこのコンテナ持ってきてやがれ！」

「この馬鹿野郎共が！ 何でデッキ開放されるのにノーマルスーツ着ねえんだよ！！」

等々。あちらこちらを飛び交う怒号の中でも、目覚ましい程効率的に出撃準備は整っていった。

寄港先の『ルナツー』が近いため、【アルバトロス】のMS部隊はカタパルトを使わずに直接発進していた。勿論、アレックスとアネシスも例外ではない。

「アレックス・レイバード、【リズイクス】。行きます！」

「アネシス・フラメル、【アトラスト】。出るよ！」

紅の艦から、次々とMSが飛び出していく。それらは、2機で1つのチームを組み、【アルバトロス】から一定の距離をとって周囲の警戒を始めた。その中でもアレックスとアネシスは、最後の警戒にあたるため、新型ガンダムのちよつとした御披露目になった。

「おー、それが新型か！」

「いいねえ、流星はZ系列。強そうだな！」

「なあなあ、変形してみてくれよ！」

矢継ぎ早に舞い込む通信の、最後の注文に、アレックスは心えてみようとという気になった。

「変形を試します。ジェーン、こいつノンオプションで変形出来たよな？」

【アルバトロス】に残っているジェーンに確認すると、自信に満

ちた声が返ってきた。

『勿論です！ その辺の【リ・ガズイ】と一緒にたにしないで下さい！』

【リ・ガズイ】だって、立派な高級品だ。バイオセンサーまで搭載し、かの有名なアムロ・レイが駆ったその機体を、その辺の、で纏めて切って捨てるとは、いささか自信過剰かも知れない。しかしアレックスは、この【リズイクス】と、ジェーンの言葉を信じてみることにした。

「近くの機体どいて下さい！ 【リズイクス】、行けっ！」

気合一閃、アレックスの入れたコマンドに反応した【リズイクス】は、変形を開始した。胸部正面装甲を跳ね上げ、同時に機首ユニットが背部から回転してきてMS時の腹部から機体を覆う。

下腕部マウントラッチにビームライフルを装着し、脚部を縮め、鋭角的なウイングを広げる。

周りから、おお、と歓声が上がる中、アネシスは変形した【リズイクス】 ウェイブライダーに、機体を乗せた。

「担当宙域まで、どーんと飛ばしちやいなさいよ」

「タクシーじゃないです」

軽い冗談だったが、アレックスのズレた応答に、アネシスは思わず笑った。

舌噛みますよ、というアレックスの声をアネシスの耳が捉えた次の瞬間、ウェイブライダーはスラスターの方向を全て後ろに向けて初めて生まれる、その圧倒的な加速力を解放した。ぐんぐんと艦が遠ざかり、星の海に入って

20分後、アレックスは『ルナツー』内部の通路を歩いていた。

何でも特命があるとかで、ノーマン艦長と共に、司令部に呼び出しを喰らっていたのだ。

「……まだ……ですか？」

異様に鋭い視線の男　　どうやら特殊部隊の中佐らしい　　をか
わしつつ、アレックスはノーマンに訊ねる。

「もうすぐだ、ほれ、守衛が見えるだろ」

その守衛がこちらを見つけると、身分証の提示を求めた。

入港の時にもらった物を見せ、通してもらおう……と思いきや、アレックスは肩を掴まれていた。

「頑張れな、ガンダムのパイロットさんよ」

守衛は真剣な目でそれだけ言うのと、手を離してくれた。アレックスは、頑張れという言葉の真意を、そして何故自分がガンダムのパイロットであるかを知っているのかを確かめようとするが、ノーマンに窘められて大人しく司令室に入った。

司令室に入ると、アレックスはまずその広さに圧倒された。【セイバーフィッシュ】すらロクに入らないような【アルバトロス】の艦長室とは違い、ここなら【ジェガン】をうつ伏せにすれば、すっぽりと上半身を包み込める。

とにかく、広い。そのことに気を取られ、アレックスはその後の『ルナツー』司令からの話なぞ耳に入らず、いつしか昨年起きたシヤアの叛乱　　第二次ネオジオン戦争に思いを馳せていた。

事の発端はU・C・0093・02・27、水面下に軍備を整えていたシヤア・アズナブル率いるネオジオンは、地球連邦に対し宣戦を布告した事にある。続く03・04には当時地球連邦軍の本部が置かれていたチベット・ラサ地区に小惑星『5thルナ』を落下させ、地球連邦軍と本格的な戦闘状態へと突入した。

その一方、ネオジオンの政治面を司るホルスト等が地球連邦政府との間で『アクシズ』譲渡を条件とする武装解除を締結。ネオジオン艦隊は、その武装解除のために一路『ルナツー』へと発った。

しかし、ネオジオン側は当初から投降する気など毛頭なく、『ルナツー』は奇襲攻撃を喰らい、猛攻撃の果てに貯蔵していた核弾頭

を奪われてしまう。『アクシズ』も強奪され、ネオジオン軍は奪取した核弾頭と共に『アクシズ』を地球に落下させようとする。

世に言う『地球寒冷化作戦』である。

しかし、この作戦は結果的には失敗に終わる。地球へのアクシズ落下を阻止せんとロンド・ベル隊がアクシズ内部に時限爆弾を設置し、『アクシズ』を前後に分断する。この爆発が予想外に強く、『アクシズ』の前半分は引力圏から外れたものの、残る後半分が地球への落下コースをとる。そこにアムロ・レイが駆る【ガンダム】が呐喊、それに続き連邦軍、ネオジオン軍双方のMSが『アクシズ』に取り付き、押し戻そうとする。

ここで、開発時には予想だにされなかった【ガンダム】の隠された能力が発動する。アムロの意地にサイコフレームが共振し、【ガンダム】の周りに光を放ち始めたのだ。次々と光に弾き飛ばされ大気圏を離脱するMS達。そして、その光は『アクシズ』をも包み込み、地球圏から離脱させたのだった

「……尉、少尉。アレックス少尉！」

「え？ あ、は、はい！」

全く話を聞いていなかったアレックスは、いきなり話を振られても、すぐに反応することが出来なかった。

「全く、どうせこのハゲタヌキがとか思っているのだろう？ 思うのは勝手だが、人の話くらいはちゃんと聞きたまえ」

思っているのかよ、と心中で突っ込み、話に集中する。

「つい最近のことだ。アナハイムで開発していたMS、確か名前は……【シナンジュ】とか言ったか。そいつが強奪されたそうだ」

言葉に続き、【シナンジュ】とやらの三面図がスクリーンに映し出される。その姿は、前大戦で使用されたニュータイプ専用MS、【サザビー】のイメージを踏襲している。それがどうしたと思うと、その思念を読み取ったかのように司令が言い放つ。

「君だつて新型ガンダムのテストパイロットだろうが。良くて強奪、最悪撃墜される可能性も捨てきれんのだぞ。それにこのような実戦にも対応出来るMSが強奪されたとなると、近い内にネオジオンの残党共が軍事的アクシオンを起こす可能性が高いという事だ。少しは頭を働かせたらどうだね、まだ若くて柔軟なそれを活用せんで勿体無いとは思わんのか？」

その言葉は、アレックスに緊張感を持たせるには十分過ぎた。

一応【シナンジュ】の搜索と、引き続き【リズイクス】のテストという任務を受け、アレックスとノーマンは司令室を後にしたのだった。

第4話：ジオンの影

【アルバトロス】内、MSハンガー。そこで、アレックスは『ルナツー』から帰って来てからずっと部屋に戻る事はなかった。

「アレックスくん、そろそろ食事行こうよ……っ」と

アネシスが呼び掛けると、当のアレックスは【リズイクス】のコクピットにいた。どうやら先程の出撃のせいで、詳しい機体のスペック等に目を通していなかったようだ。

アレックスは、アネシスの声に反応すると、【リズイクス】のメンテナンス・ハッチを蹴って近付いてきた。その顔は、驚きと興奮に満ちていて、まるでクリスマスプレゼントを貰った子供のようなった。

「先輩、この【リズイクス】凄過ぎますよ。【リ・ガズイ】の皮を被った【ガンダム】なんです！」

前大戦で奇跡を起こした伝説の機体を出され、アネシスは俄然興味を持ち始めた。

「【ガンダム】ってどういうこと？まさかとは思うけど、【リズイクス】にファンネルの実装が決定してるの？」

疑問符を頭の上に浮かせるアネシスをコクピットに連れ、アレックスはディスプレイ・ボードを示す。

「見て下さいよ、この赤いところ、全部サイコフレームですって」

ディスプレイ・ボードに表示された【リズイクス】のCGの、四肢の関節とコクピット周りが赤く輝いている。これ等全てがサイコフレームとなると、結構な量になる。

「道理で反応はいいし、機体も軽いわけですよ。【リ・ガズイ・カスタム】じゃ、こうまで軽く出来ません」

でも、とアネシスは話を変える。

「サイコフレームをここまで使ったら、コストが相当高く付くんじやない？」

サイコフレームはつい1年前にネオジオンから技術が流出したばかりであり、まだまだ生産技術を完全に出来ていないとは思えない。アナハイムが何故そんな無駄とも思える事をするのかが理解出来ないアナシスに、アレックスが耳打ちする。

「アナハイムの裏側でMS用に超高品質のサイコフレームが製造されてるっばいんですが、【リズイクス】に使われてるのは、その規格落ち品らしいんですよ」

「ち、ちよっと、そんなこと何で分かるのよ？ まさかとは思っけど……」

アナシスはそこで言葉を切り、キーボードを叩く仕草をする。それにアレックスは、笑顔で応えた。

「トップシークレット企業秘密です、と言いたい所ですが、流石は先輩、御名答。サイコフレームの出所についていくら訊いても、アナハイム側はノーコメントの一点張りでしたので」

更に、アレックスは真剣な面持ちで続ける。

「1つおかしいのが、そのデータ、どこにあったと思います？」

アナシスは、ありったけの知識をかき集めてそれに答える。しかし、脳内をいくらサーチしても、あまり大した数は出揃わない。

「えー……つと、『アナハイム』とか、『グラナダ』？」

「ハズレです」

本社のある月面都市やサイコフレーム開発の権威である工廠の名を出しても、アレックスはそれを否定した。となると、残りはいかに絞り込みが出来るはずだ。

「じゃあ、『フォン・ブラウン』かな。でも、『リバモア』や【ラビアンローズ】もあるかも……」

「全部ハズレです。答えは、『インダストリアル7』。未完成のアナハイムの工業コロニーははずなんですけど、ものすっごくガードが堅くて」

そこに、横からジェーンが割り込んできた。今まで作業をしていたのか、袖口に少し機械油の付着したツナギ姿でふわふわとコクピ

ット前に浮いている。

「アナハイムの工業コロニーがどうか、一体何の話ですか？」

興味深々、という雰囲気を目で見える程に体中から発散しているジエーンに、アレックスが素早く話を作る。

「いや、最近パイロットの間で流行りの怪談話なんだけどさ。あそこで、【ジム】だか【ガンダム】だかの化け物が出るらしいんだ」

【ジム】も【ガンダム】も、余程の事が無い限り普通混同する者はいない。特に、素人ならぬ正規の軍人がMSの見分けも出来ないようであれば、それはかなり致命的だ。ジエーンは、そこに食いついた。

「だが、ってどういう事です？」

「変形……いや、変身するらしいんだ。いつもは白い【ジム】なんだけど、見つかると赤く光る【ガンダム】になって、見た奴らを皆殺しにするんだって」

勿論、アレックスは出鱈目話としてでっち上げたに過ぎない。しかし、この変身する【ガンダム】は実在するのだが、それはまた2年後の話であった。

ふうん、と話を切り上げ、次の作業の為に立ち去るジエーン。その後暫くするとアレックスは、明後日の方向を睨みつけていた。アネシスがそれに気付き声をかける。

「アレックス君どうしたの？ 怖い顔してる……」

「あ、いやちよつと変な感じがして……」

曖昧に答え、また元の向きに戻るアレックス。その視線の先には、

【アトラスト】が固定されていた。

「あの【アトラスト】が気になるの？」

何にもないわよ、と宥めるが、アレックスはまだ続ける。

「【アトラスト】じゃないです。何か、こっ……」

そこで一旦言葉を切り、アレックスは眼差しを一層険しくする。

「……宇宙か！」

低く叫ぶアレックスに、MSハンガーの全員の視線が飛ぶ。が、

幸運なことに、「アルバトロス」のクルー達は有能だった。

今アレックスは、「リズイクス」のコクピットにいる事。

そしてその【リズイクス】には、サイコフレームとバイオセンサーが搭載されている事。サイコフレームとバイオセンサーには、ニュータイプ能力を増大させる能力がある事。ニュータイプには、遠くにいる敵の殺気を読む能力がある事……。それらを数瞬で理解した整備士達は、いつもかけているMSのセーフティーロックを密かに解除し、いつでも戦闘に突入できるようにしたのだった。いつもは穏やかなアレックスが、あそこまでキツイ表情をするのは、『5thルナ』や『アクシズ』を落とされた時以来だった。

『シャアの叛乱』が終結してから凡そ1年半。
2つのサイコミュの力を借りたアレックスは、再び巻き起こるであろう戦乱の気配を鋭敏に感じ取っていた。

『ルナツー』から遠く離れたアステロイドベルトに位置する、1つの大型小惑星があった。『モウサ』を中心に、大小3つの小惑星と核パルス・エンジンを備えたそれは、連邦軍の監視をすり抜けて建造された、ジオン軍残党の基地であった。

打倒連邦と、ジオン再興の志の下に、多くの将兵が集まり、その規模は、ミネバ・ラオ・ザビを擁する『袖付き』に勝るとも劣らぬほどで、構成員の士気は非常に高かった。

その基地の格納庫で、1人の男が佇んでいた。視線の先には、【AMS-119SV サイラス専用ギラ・ドーガ】があった。

「どうした、サイラス」

サイラスとよばれた男は、声のした方を振り向き、そこにパイロット用ノーマルスーツを着込んだ友人の姿を認めた。

「ああ、カリウスか」

カリウス・オットー。ジオン公国軍、デラーズ・フリート、アク

シズと長きに渡って地球連邦軍と激戦を繰り広げて来た兵士であり、アナベル・ガトーからも信頼を置かれていた優秀な男だ。

「出撃に、何か不安でもあるのか？」

「まさか。俺が大丈夫だと踏んでいるんだぞ」

年齢こそカリウスの方が5歳程年上だが、戦艦【グワンザン】を部隊運用艦として第二次ネオジオン戦争を戦い抜いた頃から、2人は息のあった連携攻撃で幾多の敵を撃破してきていた。そして今、再びその鮮やかな攻撃を披露すべく、部隊が『モウサ』から発とうとしていた。外宇宙への定期パトロールも存在する為、露払いとしてまずは少数のMSを発進させ、その後に艦隊を続かせる手筈となっている。

「いよいよだな」

「おう、全てはジオン再興の為に、スペースノイドの自由の為に」
2人は短く言葉を交わし、それぞれのMSのコクピットへ向かった。カリウスは、旧ジオン公国の【ドム】の面影を色濃く残したMSへ。

「カリウス・オットー、【ドライセン】。発進する！」

サイラスは、同じく旧公国の【グフ・カスタム】を彷彿とさせる塗装の【ギラ・ドーガ】へ。

「サイラス・ブランフィールド、【ギラ・ドーガ】。行くぞ！」

『ルナツー』にいるアレックスが感じた、戦乱の火種が、宇宙に飛び出した瞬間であった。

第5話：エース再来

【アルバトロス】は『ルナツー』を離れ、『コンペイトウ』を通過し、月へと向かっていた。慣熟飛行を兼ね、アレックスの【リズイクス】が艦橋付近を飛ぶ。暗礁宙域であるためデブリが多い。しかしアレックスは、器用に【リズイクス】を操りひよいひよいとそれらを避けていく。

「おっ……と」

時たま、【アルバトロス】に当たりそうなコースのものもあり、それらを破壊したり、コースをそらすのもアレックスの仕事だ。ビーム兵器を使うと消耗も激しく、誤射した場合のダメージも大きい為に、今回はジャンク品だったヒートマホークを持って出ている。勿論正規の装備ではない為に、機体のFCSに少々手心を加えてマニユアルで動作するようにしてある。

大小3つのデブリが接近し、アレックスは素早く状況を判断して行動に移した。1番小さいものは蹴って軌道をずらし、1番大きいものはヒートマホークで切りつけ破碎する。

しかし、最後の1つが問題だった。

アレックスの考えでは、残った一つは腰部に据え付けられた作業用機械のアンカーランチャーを打ち込み、振り回して軌道を変えようとしていた。

アンカーを打ち込むと、そのデブリは爆発したのだ。咄嗟にシールドを構えて爆発から身を守る。

「なんだこれ！？ デブリじゃなかったのかよ！」

コクピット内に、装甲に破片が当たる音が響く。閃光でモニターが焼き付く中、何とか生き残っていたレーダーに敵影が映り、アレックスは全てを理解した。

「まんまと奇襲に引っかけたってわけか……！」

レーダーを頼りに、【リズイクス】のバルカン砲が唸りを上げる。

しかし命中はしなかったらしく、漸く回復したモニター上には、【MS-14F ゲルググマリーネ】が3機共に健在であった。

「まさか【ガンダム】とはな…！」

【ゲルググマリーネ】の性能では勝てそうにもない敵の出現に、小隊長は歯噛みした。今まで残党生活は長く、海賊紛いの行為で【ジエガン】程度なら何とか倒して来たものの、今回ばかりは相手が違う。

せめて母艦である【ムサイ級後期型】を離脱させようと覚悟を決め、部下に呼びかける。

「あの羽根付きガンダムを徹底的に叩く。ついて来い！」

3機の【ゲルググ】が、残り少なくなったプロペラントタンクを投げつけ、機雷宜しく爆発させる。

アレックスはモニターが回復したことで、少し落ち着きを取り戻していた。彼我戦力の比較と状況把握を手早く済ませ、操縦桿を握り締める。誰も、殺したくはないから

「やれる……やってみせる！」

ヒートマホークを突撃してきた【ゲルググ】に投げつけ、牽制しながらビームサーベルを抜き放つ。動きが鈍くなった敵をバルカン砲で更に足止めし、一気に詰め寄る。

「サイコミュがある……出来る！」

二刀流のビームサーベルが【ゲルググ】の両腕を切り裂く。しかし勢い余って、脚まで切り落とし、だるまのようになった【ゲルググ】は宇宙を漂い始めた。

「パイロットは……よし、生きてる」

それだけ確認すると、次の目標を見据え、アンカーを相手の肩に打ち込む。

『何……!!』

接触回線が開き、相手の声が耳朵を打つ。

「退いてくれよ、頼むから!」

【ゲルググ】の腹に蹴りを入れ、最後の1機の方に飛ばす。先程のたるまも、手で押しやって回収させる。

『敵に情けをかける気が、【ガンダム】!』

まだ通信が生きていたのか、無事な【ゲルググ】のパイロットが叫ぶのが聞こえる。

「俺はテストパイロットだ。人殺しのためにMSに乗ってるんじゃない!」

『そうか……戦士としては甘いな。しかも己の仕事の本質も理解してはいない。次はこうはいかんぞ!』

それだけ言うと、【ゲルググ】は僚機のパイロットを回収して撤退していった。

帰艦したアレックスを待ち受けていたのは、整備班長のシグルス・ヘクトールの姿だった。

「こらアレックス、トマホークどこやりやがった!」

アレックスはうっと返答に詰まり、視線を泳がせる。

「たぶん……今頃『コンペイトウ』だと思う」

『サイド1』で一度補給を受け、現在は『サイド4』に近付いている。今更『コンペイトウ』など行けず、シグルスは大きな溜息をついた。

「お前なあ……。斧ぶん投げるって、アニメじゃねえんだからよ」

「ごめん……でもとっさの事だったし、さ」

アレックスは何とか弁解し、そそくさとその場を立ち去ろうとする。しかし、シグルスの声がそれを許さなかった。

「……何じゃこりゃ!? 腰周りがボロボロじゃねえか!」

更に、シグルスの部下の報告が追い討ちをかける。アレックスの背

中には、冷や汗が浮かんでいた。

「脚部関節、かなりガタがきてますよ。サイコフレーム以外全部取り替えてす！」

その他にも、モニターの残留ハレーション、アンカー欠損、左腕マニピレーター出力低下等々……。矢継ぎ早に舞い込む異常報告に、シグルスの怒気は益々膨らみ、アレックスの焦りも最高潮に達していた。早くここから逃げ出さなくちゃ

アレックスの思念とは裏腹に、体は恐怖で動けなくなっていた。そして、最悪の瞬間が訪れる。

長々と続いた報告を聞き終えたシグルスが、ゆっくりとアレックスの方へと振り向く。

「アレックス……！！！」

シグルスの怒りは凄まじく、艦内の誰もがピリピリした空気を感じた。

そこに、【リズイクス】破損の報を聞いて怒り狂い、文字通り飛んできたジェーンが乱入してくるのだから、アレックスは堪ったものではなかった。

「【リズイクス】を潰す気ですか少尉の馬鹿ー！！！」

上官に馬鹿はないだろう、と振り向いたアレックスが目にしたのは、今まさに顔面上段回し蹴りを入れようとしているジェーンの姿だった。

「……しm」

言葉の続きはなく、代わりにジェーンの蹴りがアレックスを仕留めた音が艦内に轟いた。

アレックスは宇宙にいた。

一応ノーマルスーツは着ているが、ヘルメットは被っていない。

これは夢だ、と気付き、辺りを見回してみる。

「子供……?」

確かに、1人の少女がいた。

(助けて)

「何だ……?」

(助けて。みんな殺されちゃう)

少女は、再びアレックスに呼びかける。

「殺されるってどういう事だ?なぜ君は俺を呼ぶ?」

(敵が来るの。貴方なら、聞こえるから)

「敵ってどこのだ。待って、答えてくれ!」

(ごめんなさい……もう……限界……)

アレックスの叫びも虚しく、少女の姿は霞んでいき、見えなくなつた。

「……月か!?」

少女の姿があつたところには、間違いようのない物が浮かんでいった。

「ぶっ……はあ!?!」

アレックスが意識を取り戻したのは、【リズイクス】のコクピットの中だった。どうやらジェーンが蹴り飛ばした時にリニアシートにぶつかり、反動でコンソールをいじってしまったらしい。ハッチは閉じ、メインカメラも起動していた。服装もノーマルスーツのままだ。

アレックスは意を決すると、口を開いた。

「シグルス、ジェーン。いるか?」

『いるさ』

『いますけど』

普通な調子で返すシグルスに対し、ジェーンはまだ不機嫌な様子だった。まだ【リズイクス】を傷付けたことを根に持っているよう

だ。

「……もう、蹴ったりしない？」

恐る恐る尋ねてみる。

『俺は蹴らんが、問題はお嬢だろうな』

『お嬢言わないで下さい！』

30過ぎのシグルスには、その反抗が眩しいらしい。目を細めながらアレックスに語りかける。

『なあ、アレックスよ。俺達は、完成したMSの整備に命かけてる。だが、このお嬢 イテツ、蹴るなよ！ は、こいつがまだ凶面の頃から面倒みてんだ。傷だらけになつて帰ってきた我が子を見て、取り乱すのも当たり前だろうが。取り敢えず謝っておけ、な？』

『……』

諭すようなシグルスの声に、途中ジエーンは口を挟むことなく蹴りは入れたが、静かにしていた。

「分かりました。ジエーン」

最大の勇気を振り絞って、コクピットハッチを開けながら呼ぶ。

「【リズイクス】を損傷させたことは謝るよ、ごめんなさい。俺が悪かった」

『じゃあ決まりね！』

突然声上がる。どこだ、と辺りを見回すと、【リズイクス】の隣の【アトラスト】がひらひらとマニユピレーターを振っている。

広大なMSハンガーをもつこの艦だから出来る荒技で、これをやる度胸の持ち主を、アレックスは一人しか知らなかった。

「アネシス先輩!？」

「何が決まりなんだ、中尉よう」

驚くアレックスと、スパナを肩に当てながら尋ねるシグルス。

アレックスは、嫌な予感がしていた。士官学校時代にも、こういつたことがあったからだ。

『決まってるじゃない、もう機体を傷付けない為にも、特訓よ!』
マニユピレーターをぐつと握り締めながら叫ぶ【アトラスト】の

乗り手に、アレックスはこの時ばかりは怯えた。

U・C・0092にアナハイムで試験MS運用艦として建造されていた【アルバトロス】には、当然ながらシミュレーション室が設置してある。アレックスとアネシスは、そこに向かっていた。

「だから、月がヤバいんですよ、俺見たんですから！」

「さつきからそればっかし。夢でしょ、夢」

「【リズイクス】のコクピットの中に蹴り込まれた時に見たんです！」

その言葉に反応して、アネシスは急に足を止め、アレックスの方に振り返った。

「それ本当？」

嘘を吐く理由がない、とばかりにアレックスは頷き、それを見たアネシスは慌て始めた。

「なんでそういうこと早めに言わないの！ アレックス君ニタ研の検査は、5段階中ランクCで一応ニュータイプの卵だったでしょうが！」

うわ、と頭を抱えるアレックスの手を引つ掴み、艦橋の方に引き摺っていく。勿論、艦長に具申して月に向かい、出現すると思しき敵部隊を掃討する気らしい。

「そのくらい、艦内通話のパネルで出来ますよ……べふっ!？」

気が立っているアネシスに余計なことを言ってしまったアレックスは、その報いとして件のパネルに顔面を叩き付けられた。

「分かってるなら早く言つてよ!!」

あれだけ強い衝撃を受けたのに、パネルは無事だった。早速パネルと向き合い、アレックスは艦長とコンタクトをとろうとする。話し込むこと5分間、どうやらアレックスの言い分が通ったようだ。その証拠に、艦内に警報が鳴り始める。

『月面都市『リバモア』からSOSシグナルをキャッチした。本艦は全速力でこれに向かう。総員第一種戦闘配置!』

艦長の声が終わるか終わらないかの内に、【アルバトロス】の巨軀が加速を開始した。

「なんで『リバモア』なの？」

「新型の開発をやってるらしいんです。可能性としては、そこが高いですから」

この新型機開発に関する情報はアネシスも掴んでいた。そして、そこに誰がいるかも記憶していた。

「教官、大丈夫かな……？」

「『デラーズ紛争』を戦い抜いたエースです、きっと大丈夫な筈……」

アネシスに答えるアレックスの声も、どことなく不安げであった。

『敵襲！ 【ゲルググ】 2機、【ザク？改】 4機。格納庫に向かっていきます！』

『リバモア』は、突然の敵襲によって、混乱の渦に叩き込まれていた。

【ジェガン】部隊が応戦していたらしいのだが、全機撃墜されらしい。奇襲という事を考えても異常な事態に基地全体が戸惑う中、格納庫では2人の士官のみが平静を保っていた。

「来たな、敵。避難のために、時間稼ぎしないと」

「ああ、【アルバトロス】がこっちに向かってきているらしいな」

「【アルバトロス】か。2人とも、上手い事やってるかな……？」

その言葉を最後に、2人は戦士の顔になる。1人は新型機【MSA-013N トランシエガンダム】に飛び乗り、もう一人は直掩の【RGM-89S スタークジェガン】のパイロットと交代する。

「ガンダムか……。あまりいい思い出はないな」

ぼやきに気付き、【スタークジェガン】から通信が入る。

『それ、【ステイメン】に似てるから大丈夫だろ？』

確かに、かつての自分の愛機の名残が感じられる。

「ああ、そうだな」

『……っと、格納庫内の人員退避完了。いつでも出られるぜ』

力強く頷き、【トランシエガンダム】を前進させる。

「コウ・ウラキ、【トランシエガンダム】。出る！」

『チャック・キース、【スタークジェガン】。続いて発進！』

宇宙のそこかしこで起こる小さな戦いの火花が、その後地球圏を巻き込む戦乱の炎になるとは、この時は誰一人として気付くことはなかった。

第6話：覚悟

月面は、宇宙や地球とは違い、微妙に重力がある。そのため慣れないパイロットにとっては苦しい戦いを強いられる環境であり、今回の戦闘ではジオン側が不利であった。

「【ザク？改】各機は突撃、私とテールの【ゲルググ】は援護射撃。攻撃を開始せよ！」

応、と声を上げる【ザク？改】の隊が一齐にスラスターを噴射して、上がってきた【ガンダム】に向かう。

「テール、お前は今回が初陣になるそうだが、大丈夫か？」

「はい、イリア隊長」

テールと呼ばれた少女は、不安さを微塵にも感じさせない、どこか機械的な声を返した。

「よし。ついてこい、墜ちるなよ！」

イリアの声と同時に、2機の【ゲルググ】は猛然と突撃を開始した。

しかしイリアは、ここで1つの事実に気が付く。以前乗っていた【リゲルグ】の時の癖が抜けきっていないのだ。

「ちっ………！」

所詮、15年前の機体だ。期待する方が間違っているのだが、イリアが乗っていた【リゲルグ】は今でも通用するレベルの機動力は持っていた。その時の操縦のクセが時々出てしまっていたのだ。

「敵機を捕捉しました、射撃開始します」

通信機から響いたテールの声で我に帰り、イリアも続いてトリガーを絞る。【ゲルググ】の持つ長大なビーム・マシンガンから、メガ粒子の塊が間欠的にばらまかれ、【ガンダム】を襲った。しかし、黄緑色のビームは【ガンダム】をかすりもしなかった。テールとイリアは、さらにビームを撃ち散らす。

その頃キースは、【スタークジェガン】で【ザク？改】の相手をしてきた。1機の【ザク？改】を中破させてはいたが、しかしその代償として左肩のミサイルは弾切れとなってしまうている。

「退いてくれよ！」

必死の叫びもむなしく、残りの【ザク？改】は執拗にキースを狙ってくる。90mm口径の弾丸を撃ち放ち3機で突っ込んでくる【ザク？改】の先頭に、ハイパーバズーカで散弾を放つ。チタニウム製のベアリング弾が【ザク？改】の関節に容赦なく穴を穿ち、機能不全に陥れた。

「あと2機……！」

コクピット内で叫ぶキースは、再度突撃をかける【ザク？改】が一瞬だけ旧世紀の戦闘機に見えた。機首にプロペラを備え、翼に太陽を象った赤丸をつけた濃緑の機体。

直後、自身の目を疑ったキースを振動が襲った。すれ違いざまにハイパーバズーカの砲身を叩き切られたのだ。牽制のミサイルも回避され、ビームサーベルに持ち替えた【スタークジェガン】に、再び【ザク？改】が迫る。

「神風かよ！」

キースは機体を加速させ、ヒートホークを構えた【ザク？改】の腹部にビームサーベルの一閃を叩き込んだ。

『速い……！』

【ガンダム】は必要最小限の機動でビームを全て回避する。しかしその後の行動が不可解であった。【ゲルググ】や【ザク改】のいる方向ではなく、明後日の方向に向かってしまったのだ。

「畏かもしれんが……」

『追います』

訝しむイリアを余所に、テールは焦って追撃を開始していた。【ガンダム】がわざと【ゲルググ】が追い付いてくれるほどの速度にしていることさえ、今のテールには気付けなかった。

「やはり急場しのぎの調整では……！」

イリアが慌ててテールを追おうとすると、【ガンダム】がこちらに何かを放ってきた。

ミノフスキー攪乱弾。中に縮退寸前のミノフスキー粒子を大量に封入し、更に閃光弾やチャフまで入っている、厄介な代物だ。それはイリアの【ゲルググ】の前で炸裂し、見事に効力を発揮した。

「くっ……！」

レーダーも通信も無効化されたMSは、非常に危険であることはイリアも知っていた。だが、テールのことを考えると、退くわけにはいかない。

「小癩な真似をつ！」

記憶を頼りに【ガンダム】を追跡しようとするイリア。しかし彼女の目の前で、2度目の爆発が起きる。閃光弾ではなく、もっと瞬間的な、大きな爆発。

技量差で考えれば、【ガンダム】が撃墜されるわけがなく、だとすれば。

「テールっ……！」

ミノフスキー粒子が霧散し、回復したレーダー上にはテールの【ゲルググ】はなく、代わりに別方向から連邦軍の戦艦が迫っていた。

1発の信号弾が宇宙を染め、イリアにも撤退を促す。迷っている時間はなく、仕方なくイリアはその場を後にした。テールを失った悲しみを抱えながら。

コウは、【ゲルググ】を完全に撃墜してはいなかった。頭部と腕部、バックパックを絶妙なタイミングで切り落とし、本体を行動不能にしたただけだったのだ。【トランシェガンダム】でもう1機の

【ゲルググ】を追撃しようとするが、敵はやってきた【アルバトロス】を確認すると、信号弾を上げてとっとと撤退してしまった。

「キース、生きてるか？」

『上々だ、コウ。それより、撤退した敵機はどうする？』

『リバモア』に貼り付いて【ザク改】の相手をしていた戦友に声をかける。すぐに元気な返事がきて、コウは胸をなで下ろした。2人とも実戦離れしていて、正直自信がなかったのだ。

「航続距離が足りない。追うのは諦めて、【アルバトロス】に着艦させてもらおう。」

『だな、賛成』

ふと傍らの【ゲルググ】を見、少し悩んだ後に【トランシエガンダム】の両手で抱えて、2機で【アルバトロス】へ向かった。

『フォンブラウン』から来た【クラップ級巡洋艦・ブラウゼファール】がヴァルハラ隊に臨時編入され、今まで【アルバトロス】に搭載されていたMSの半数が【ブラウゼファール】に移されることになり、【トランシエ】とキースの【スタークジェガン】のスペースは確保された。コウが持ち帰った【ゲルググ】も【アルバトロス】での調査が決まり、MSハンガーは少し狭くなったように感じられた。

そんな中アレックスは、アネシスと共に【ゲルググ】の調査に立ち会っていた。

「【ゲルググ】って、15年も前の機体だよ、どうしてそんなに保つのか？」

「『統合整備計画』で、MSの部品を共通化したんです。これは確かアナハイムの方でも一部流用された企画だから、大破した他のMSからパーツ取りして運用してきたのかも」

2人がそんな話をしていると、シグルスが【ゲルググ】のkok

ピットハッチを強制開放した。ハッチを開ける、という指示に従わず、沈黙したままだったからだ。

「アネシス、ちつとばかり手伝ってくれ」 相手は30過ぎた中年男の言うことは聞かない、と判断したシグルスは、アネシスと呼んだ。うら若き美人士官の誘いなら受けてくれるだろう、という魂胆らしい。

シグルスの作戦に乗り、アネシスは【ゲルググ】のコクピットに身を流した。

「連邦軍がイヤなのは想像つくけど、ちよつと出てきてもらえる…」

コクピットの中を覗いたとたん、アネシスは絶句した。ノーマルスーツの起伏を見るかぎりでは、パイロットは少女だったのだ。

「こんなことつて……」

肩を揺すつても動こうとしない少女を不審に思い、アネシスは少女のヘルメットをとる。その下から露わになった顔が、アネシスをさらに動揺させた。

「嘘でしょ……!?!」

ほとんど悲鳴と化したアネシスの声に、たまらずアレックスが駆け寄る。

「どうしたんですか先輩……ってこの子!」

アレックスもアネシス同様、【ゲルググ】のパイロットに見覚えがあった。いや、見覚えがあった、では済まなかった。

「テール・ヴィンセントがなんでジオンにいるの……?」

「分かりません……」

【ゲルググ】のパイロット テール・ヴィンセントは、アレックス達がオークリー基地にいた頃に何度となく声を交わし、年下の友達とも呼べる存在だった。料理長の一人娘で、よく父親の仕事を手伝いに基地な出入りしていたのだ。

テールが何故ジオンのパイロットになっているか。アレックスとアネシスが悩んでいると、後ろの方から声が聞こえてきた。

「ジオンって、あちこちから戦災孤児を引き抜いて来てニュータイプ研究してたって聞くけど？」

「テイターズもな。ただ、所詮はネオジオンの残党だろ？ チャチなマインドコントロールは出来ても強化人間なんか出来やしないだろ」

2つ目の言葉に2人ははっとなり、顔を見合わせた。以前にテールが、『私のエクレアがなくなったら、ショックでサイドが丸ごと1つ消えちゃいます』と言っていたのを思い出したのだ。比喻ではあるのだが、本人にとってみれば生死の次程度の大事である事には違いない。

強化や洗脳をされていたとしても、テールが幼い頃に逝った母親とテールとを結ぶ大切なものだ。深層心理に深く食い込んでいる事は間違いないだろう。

「賭けてみる価値はあるんじゃないかな、これ」

アネシスは力強く言い放ち、アレックスに目配せした。アレックスは頷き、【アルバトロス】の料理長と話をしに行った。

数分後、アレックスの手にはチョコをふんだんに使った、見るからに甘そうなエクレアが乗っていた。

それを確認すると、アネシスは気を失っているテールの鼻先にエクレアを近付け囁く。

「ほらテール、冷蔵庫に大事に大事にしまってたテールのエクレア、食べちゃうぞー」

「早く起きないと、アネシス先輩に食べられるよー」

周りのクルー達は、一体アネシスとアレックスが何をしようとしているのか全く分からなかった。あまりに空々しい演技に失笑が漏れ、ジエーンに至っては卒倒してしまう程だ。しかしその一瞬後に響き渡った声に、ようやくアネシスの魂胆を理解した。

「私のエクレアー！！」

テールの意識は瞬時に覚醒し、彼女の細い右腕が唸りを上げてアレックスの顔面を直撃する。突然の攻撃に反応出来ず吹っ飛ばすアレ

ツクスに気を取られ、アネシスはエクレアを奪われてしまった。

「何で……こんな……」

気絶寸前のアレックスが宙を漂う中、テールは幸せいっぱいエクレアをかじっていた。

「んう、やっぱりエクレアは最高です」

最後のひとかけらまできれいに食べ終えて、ようやくテールはアネシスに気付いた。

「あれ、アネシスさんじゃないですか？」

アレックスの顔面という犠牲と引き換えに完全に記憶を取り戻した年頃の少女の姿に、アネシスは思わず涙した。

「テール……よかった、本当によかった……！」

「????？」

アネシスの涙の理由が分からないテールは、まず自分の周りを見回した。

「あの……なんで私ジオンのノーマルスーツなんか着てるんですか？ それとアレックスさんが見当たらないんですけど……」

テールの質問の後半部分に、クルー達の大半が吹き出した。

「笑い事じゃない……」

未だにお迎えが来そうな状態で漂うアレックスを、アネシスは真っ赤な顔をして指差す。アレックスは見るからに気絶しかけていて、体を動かすことすらままならない様子だった。

「うわー!!!」

テールが駆け寄り、アレックスを介抱し始めた。

「どうしたんですかアレックスさん、ひどい様子ですよ!？」

アレックスはテールがぶつかった拍子に壁により、口の端から出る血でハンカチに弱々しく字を書いていた。文面はお約束通り、『テール』である。

それがさらにクルーの笑いを呼び、MSハンガーは大爆笑に占拠された。

数時間後、【アルバトロス】の旧オークリー基地隊員が食堂に集まっていた。アレックス・レイバード、アネシス・フラメル、コウ・ウラキ、チャック・キース、テール・ヴィンセントの面々である。本来ならばテストパイロットや後方勤務要員である彼等は、今回のような戦闘をする必要はない。しかし遊撃隊としての側面を持つヴアルハラ隊に所属する以上、戦闘は避けては通れない。年長者であるコウとキースは、皆の覚悟を聞くために集合をかけたのだ。

『リバモア』以前にも戦闘はあったみたいだけど、テストパイロットの俺達に戦う道理はない」

「でも、ヴアルハラ隊は遊撃隊でもある。普通のテストパイロットと違って、有事の際には前に出てドンパチやらないといけない」

「最悪、敵との全面戦闘というのもありえない話じゃない。少なくとも人を殺すことになるだろう」

コウとキースの言葉に、他の3人は押し黙る。歴史の闇に葬られ、次の戦乱の芽を育てる要因となった『デラーズ紛争』を生き延びた2人の言葉は、それほどまでに重かった。

第7話：会敵

アレックス達は、その場で答えを出すことは出来なかった。だが、その事がコウを喜ばせた。

「よく考え、よく悩め。特にこういう問題は、さっさと答えを出せる奴は嘔吐きだけだからな」

「じゃ、気持ちが悪かったらMSハンガーに来て、コウに話してね」

キースは三人に言うと、コウに着いて部屋を後にした。

「人殺しをする為にMSに乗ってるんじゃない、か」

自室に戻ったアレックスは、照明をつけることもせずひとりこちる。特に戦う理由もなく、ただ襲ってくる敵を退かせるだけだったが、次からは違う。ネオジオンの基地を潰しに行ったり、場合によってはコロニー戦もありえるのだ。そういったことを考えなくてはならない現実に、アレックスは心底恐怖した。

アネシスの意志は最初から決まっていた。両親と不仲な彼女が連邦軍に志願すると、家族の仲は冷え切った。機動兵器に乗る以上、殺人をする覚悟は出来ている。だが。

「色々、やなことあるんだよね……」

覚悟はあれど、コクピットを撃ち抜いた時のあの不快感は拭えない。シミュレーションだけでしか敵機を撃墜していないが、それでも不快感が生まれた。実戦に出れば、もっと生々しいものを感じるだろう。

アネシスはそれがたまらなく嫌だった。

テールは、最初から艦に残ると決めていた。どうせオークリーに帰ったところで何があるわけでもなし、だったら手間をかけること

はない。それに、自分を救ってくれたこの艦はコックが不足しているというので、恩返しとして働こうと思っていた。

「そうとなれば、まずは挨拶から」

意を決したテールは、【アルバトロス】の調理場へ足を向けた。

3人の内2人が悩み始めて1週間、【アルバトロス】は地上での任務を遂行するために地球へ向かっていた。『サイド2』を經由し、『リバモア』で出来なかった補給と乗員の休息をして、それから地球へ向かう。

ダカールに呼び出しをくらっているので、まずはアフリカに降下。恐らくジオン残党の掃討でアラビアか北欧に飛ばされる、というのが艦長からの説明だった。

「全く、人使いが荒いんだから」

「言わない言わない。今に始まったことじゃないだろ？」

愚痴るキースをコウが慰めるが、あまり効果は得られない。一応休暇はあるが、たった半日しかないのがキースには極めて不服だった。

今更新しい戦争が始まるなどとは思えない2人は、揃って溜め息を吐くしかなかった。

『サイド2』に到着した【アルバトロス】と【ブラウゼファー】の2隻は、一部の待機要員を残して多数のクルーを送り出した。その中には、アレックス一行の姿もあった。

「アネシス先輩、イタリア料理の美味しいレストランがあるんですけど、食べに行きませんか？」

アレックスの問い掛けにアネシスは笑顔で答える。

「うん、いいよ」

初めてのデートの誘いが成功したアレックスの心は、正に空へと

昇らんばかりであった。もつとも、アレックスがいるのは真空中に浮かぶスペースコロニーであるが……。

その様子を物陰からうかがう五人の男女がいた。コウ、キース、シグルス、ジェーン、テールである。

「なんだ、若えっていいなあ」

髭や頭に白い物が出始めているシグルスのぼやきに、ジェーンが返す。

「あら、私だつて若いのよ、お・じ・さん」

「お嬢、いつかミサイルランチャーに装填してやろうか」

片目を瞑つて人差し指を振るジェーンに、シグルスはドスのきいた声で静かに脅す。しかし、コウのチョップを脳天に喰らい、二人とも地面に転がった。

「何の為に尾行してると思ってるんだ、気付かれるだろ」

提案者であるコウとキースに金魚の糞よろしくついてきた3人は、ガクガクと首を縦に振る。次は撃たれると思つたからだ。

サイレンサーを装着したM71A1拳銃を腰に差し、靴底にウレタンを貼る等徹底的なまでに防音処理を施したコウには、日本人風な名前に相応しく、江戸っ子の野次馬根性が本能的に備わっていた。「出歯亀つていうんでしたっけ、こういうの……」

テールの無駄知識が発揮され、コウの心を密かに抉る。

「お、見ろよ。アレックスの財布がヤバくなりそうだぜ？」

キースの言葉で全員の視線が一点に集中する。アレックスとアナシスは、宝石店の前にいた。

アレックスは激しく迷っていた。アナシスが5分もショーウィンドウに貼り付いて、動こうとしないのだ。いい加減人の眼差しが痛くなってきたもいた。

「せーんぱあい、そんなに欲しいんですかあ？」

「うっっ……」

命を賭けて働くにとしては安月給のテストパイロットには少し高過

ぎるネックレスが、アネシスの心を奪う輝きを放つ。

アレックスの財布の中身は一応潤っているが、ネックレスを買えば今後の生活が危うい。しかし、ネックレスを見るアネシスの顔はかなり真剣だった。

「はぁ……」

生活のゆとりを犠牲にする覚悟を決めたアレックスは、店内に入る。

「いらっしやいませ」

既に5分以上も店の前に陣取っていた客を前に嫌な素振り1つ見せない三十路過ぎの店員に、アレックスは少なからず驚愕した。

「あの……」

「ああ、あれですね？」

読まれていた。というかこの場合、読めない方がどうかしているような気もするが。

店員は一旦倉庫に引っ込むと、1つの箱を手に再度現れた。

「商品をお確かめ下さい。間違いないですか？」

「ええ、大丈夫です」

ガラスケースの中にあるものと見比べて、アレックスは頷く。

その後手早く会計を済ませたアレックスは、店員に軽く会釈した後、店を後にした。

「ガンダムに乗る者とはいえ、流石にまだニュータイプにはなりきれではない、か……」

独り残された店員　サイラスは変装を解いて呟く。

「となると、今回は他に任せるとするか」

私服姿になったサイラスは、そのまま裏口から店を出た。

「ねえアレックス君、どこ行くの？」

「えと、確かこの辺に……あつたあつた」

2人は公園に入り、ベンチに腰掛けた。寄り添って座る姿は、端から見ればさながら恋人同士のようであった。

「あの、これ」

アレックスが丁寧に包装された箱を差し出す。アネシスは不思議そうな顔をして受け取り、早速開封して中の物を見た。

「これって……」

入っていたのは、アネシスが凝視していたあのネックレス。アネシスは戸惑い、アレックスに問う。

「いいの？」

「はい」

につこりと頷かれ、思わず赤面するアネシス。そのまま2人は互いを見つめ合う。

「アレックス……」

「先輩……」

だが、その時間も長続きはしなかった。突然辺りに警報が響き、あちこちの電光掲示板に最寄りのシェルターへの方向が表示される。

「何だ……！？」

「MSか、【アルバトロス】が狙われたんだろっな」

訝しむアレックスの背後の茂みから、コウが現れた。続いてキースが無線機を手に顔を出す。

「ヤバいぜコウ、【ブラウゼファア】にも3機向かってる」

さらにジェーン、シグルス、テールと次々出てくるものだから、アレックスとアネシスは肝を潰した。

「いつから憑いてたんですか！？」

「ん？ 全部」

ジェーンの言葉が、アネシスに止めを刺した。

「見られてた……ネックレス……さっきも……」

譫言のようにブツブツ言うアネシスを引っ張り、アレックスはどろろにかエレカを捕まえる。

「大尉達は自力で帰艦して下さい、コイツには乗り切れません！」

「え、ちょっと待ておい……」

シグルスのどら声に耳を貸さず、アレックスの足がアクセルを叩

き込んだ。

『アレックス・レイバード、【リズイクス】。行きます!』

「アネシス・フラメル、【アトラスト】。出ます!」

凄まじく荒っぽい運転で目を覚ましたアネシスは、アレックスに続いて発進した。

リーダーが捉えたMSは、【AMX-009 ドライセン】と、【AMX-102 ズサ】がそれぞれ2機。【ブラウゼファー】の方は全て【AMX-006 ガザD】らしく、援護の必要はないと通信があった。

アネシスは判断する。二手に分かれ、白兵戦に長けた【ドライセン】を【ズサ】がミサイルで援護。

「アレックス君は左翼、お願い!」

『了か……えっ!?!』

アネシスの目の前で、信じられないことが起きた。【ズサ】が2機とも、【リズイクス】に呐喊していくのだ。

「やばっ!」

格闘戦がからつきし苦手なアネシスに、2機の【ドライセン】を相手取るのは至難の業だ。必死にビームライフルで接近させまいとするが、ついに1機の【ドライセン】がクロスレンジに入ってしまった。

「んっ!」

『先輩ッ!』

振り下ろされたビームトマホークをシールドで防ぐが、もう片方のビームランサーには反応しきれなかった。

「きゃあっ!?!」

右腕を斬り飛ばされ、さらに腹部に蹴りをくらって吹っ飛ぶ【アトラスト】に、【ドライセン】がロングビームトマホークで追い討ちをかける。だが。

『おりゃああああっ!?!』

変形した【リズイクス】が突っ込み、ウイングで【ドライセン】を弾いた。

「アレックス君！」

『【ズサ】がまだ1機、しつこいのがいます！ ライフル貸しますので、お願いします！』

MS形態に再変形した【リズイクス】の右手がビームライフルを放り投げ、肩部からビームサーベルを抜刀する。

幸いにも【アトラスト】が切断されたのは手首までだったので、シールドを右腕にマウントし直すことができた。左手でライフルをキャッチし、【ズサ】を捕捉する。

「乱数回避とはいえミサイル撃つ度に止まってちゃあ、ね！！」

飛んでくるミサイルを回避し、アネシスはトリガーを引く。【アトラスト】の物とは段違いの高収束のメガ粒子ビームが解き放たれ、【ズサ】に襲いかかった。

「やった……！」

しかし、アネシスが破壊したのは【ズサ】のブースター・ポッドだけだった。

ビームサーベルを構えながらバルカン砲を撃ち散らし、がむしゃらに突撃してくる敵機の姿に、アネシスは一瞬慌てた。

しかし接近される前に落ち着きを取り戻し、さらなる一撃でしつこい敵機を撃墜することに成功した。

安心すること数秒、アネシスは嫌なことに気付いた。

「確か【ドライセン】って2機いたよね」

ぞつとして周囲の索敵を開始するアネシス。レーダーに敵影が映るとアレックスの叫びが聞こえるのは、ほぼ同時だった。

『先輩、上ッ！！』

とつさにビームサーベルを抜こうとするが、右手のない【アトラスト】はただ無意味に腕を振るだけだった。それを嘲笑うように、

【ドライセン】が大きくロングビームトマホークを振りかぶり

深く暗い宇宙空間に、1つの爆光が閃いた。

杯だった。

「先輩、一体どうやって……!?」

「ふふん、イジエクシヨンポッドより早く反応してやった」

自慢げに言い放つアネシスの声に、シグルスの声が被る。

「それよりもアレックス、目の前見てみる」

言われた通り、前を見るアレックス。眼前に浮かぶのは、先程まで殴り続けていた【ドライセン】の残骸だ。

「過程はどうあれ、お前がそうしたんだ。他の誰でもない、アレックス。やったのはお前だ」

コクピット内に、シグルスの声が冷たく響く。震える手を伸ばしてコンソールを操作してみれば、生命反応は微弱なものだった。

「俺が……やった……。俺が……殺そうとした……！」

「とつとと持ち帰れ。救護班に引き渡して、説教はその後だ」

一方的に言われ、通信を切られたが、今のアレックスにはそのようなことを気にしていられなかった。

必死に【ドライセン】の胸を掴み、レーザー通信を頼りに【アルバトロス】に向かう。母艦まで約5キロほどに接近した時、接触回線が繋がった。

「聞こえるか、連邦の」

弱々しい、注意していなければ聞き取れない声だった。

「サイコミュに吞まれていたな。そのような腕前で、なぜ戦場に立つ」

問われ、アレックスはかすれた声で答える。

「本当は、こんなこと望んでない……。でも、守らなきゃやられる」

「戦争だ、これは……！ 撃たれたら討て。生易しい根性だと、死ぬぞ」

アレックスの理由を、敵パイロットは切り捨てた。甘い考えのまま戦えば、味方をも巻き込み全滅する、と付け加えて。

「それと、貴様のやっていることは我々ジオンに対するこの上ない侮辱だ。敵は討て、でなければ貴様が討たれる」

そう言うと、【ドライセン】は無理矢理スラスタを起動して離脱しようとした。背部に残っていたトライカッターのものも活用して、さらに加速をする。

「無茶だ！」

アレックスの叫び通り、ボロボロになった【ドライセン】のフレームが急加速に耐えきれずがなかった。

『ジーク・ジオン……!!』

それが、【ドライセン】のパイロットの最期の叫びだった。装甲の形が崩れ、ダメージがジェネレーターに届く。同時に、核融合炉の炉心を封じ込めていたエフィールドが消失し、炉にあった全てのエネルギーが破壊の咆哮を上げる。

【リズイクス】のコクピットが、爆光で白く染まる。アレックスはただ茫然と、涙しながらそれを見ていた。

「【ドライセン】2番機、ロスト。全滅です……」

オペレーターの言葉を聞き、艦長はしわだらけの軍帽を深くかぶりなおした。苦い顔をしながら、声を絞り出す。

「我等が祖国の為に散った英霊達に、黙祷を……」

しばらく沈黙に支配される艦橋。黙祷やめ、と艦長が言い、オペレーターは再び索敵を始める。

「周囲に敵影なし。第三戦闘配置に移行します」

それを聞くと、艦長は無言で艦橋を後にする。よく見れば、小刻みに肩が震えていた。

艦 【ザンジバル?級機動巡洋艦】は、乗員の悲しみや怒りを内に秘め、何事もなかったかのように進み続けた。向かう先は『モウサ』、ジオン残党軍基地。

サイラス大佐に呼びかけられ、スペースノイドの自由のために戦おうとしていたが、貴重なMSの大半を失っては、最早戦力外も同然だった。それでも、『モウサ』の直掩くらいは出来る、とい

うクルーの主張が通り、こうして生き延びているのだった。

「敗走に敗走を繰り返し、ここまで来たか……」

誰もいない通路で、艦長が一人ごちる。今まで逝った者達は、様々な個性の持ち主だった。

歴戦の勇士や年少兵、生粋のジオニストに現地徴用兵……。立場は違えども、皆ジオンのために戦い、ジオンのために散っていった。血で血を洗うような独立戦争に、虚脱感を覚えもした。だが、ここまで来て今さら引き返すわけにはいかない。

「これで、終わりにしたいものだな」

決意を固め、艦長は再び艦橋に足を向けた。

【アルバトロス】 【ブラウゼファー】 両艦も、かなりの痛手を負っていた。

アレックスは戦意喪失、アネシスは乗機撃墜。他にもコウが【ガザD】の特攻を喰らって負傷するなど、ヴァルハラ隊が有する戦力の実に半分近くが戦闘不能になるものだった。

アレックスの乗らない【リズイクス】には急遽アネシスが充てられたが、【トランシエガンダム】は機体に見合ったパイロットがいなかった。

ヴァルハラ隊の無事なメンバーが、【アルバトロス】の食堂に集まっていた。大気圏突入を2時間後に控え、皆緊張した面持ちである。

「エースを2人も削ったのは痛いけど、今は俺達がなんとかしなきゃいけない。急な話で悪いが、MS部隊の再編成を行おうと思う」
キースの言葉が響く。誰も異存はないようで、キースは話を続けた。

「まず、戦力のムラを無くすために、【アトラスト】隊と【ジェガン】隊は統合し、三個小隊に分ける。チームAとチームBは、艦の

防衛を担当してくれ。次に【リズイクス】と俺の【スターク・ジェガン】は、残りのチームCと共に攻撃部隊だ。俺が後ろから援護するから、しつかり頼む」

全員が起立し、敬礼する。解散の号令がかけられ、パイロット達はわらわらと食堂から出ていった。

「大尉……」

心配そうに、アネシスが声をかける。それに対してキースは、軽い調子で答えた。

「コウなら大丈夫。【ガンダム試作1号機】やフルスペックの【3号機】まで使いこなしたし、生身でも普通に怪我してるし。ま、女の扱い方はド下手だけど」

何とかなるさ、とその眼が語っていた。

それは、既に10年以上も相棒をやっていたキースだからこそ、言える事でもあった。

『大気圏突入、30分前。パイロットはMS搭乗で待機。総員第二戦闘配置！』

オペレーターの緊張した声が艦内に響く。

この時代の航宙艦は、バリユートを利用して大気圏に突入するのが一般的だ。バリユートとは要は風船みたいなもので、ビームならずとも弾丸がかすれば破裂して一巻の終わりである。そのため、まだ1度も実際に大気圏突入をしたことのない【アルバトロス】【ブラウゼファー】の各々が緊張するのも、無理はなかった。

両艦に搭載されたMSにもバリユートは接続され、いざという時には迎撃に出た後に自力で突入する手筈になっていた。しかし。

「あれ、ジェーン、【リズイクス】にはバリユートつけないの？」

「理論上はノンオプションでいけるはずです。ダミーで試験もしましたし」

いつも通りの【リズイクス】に対するアネシスの疑問は、ジェーンの言葉が解決した。

元々ジェーンの『愛』故に、ビーム・サーベルを腕部で1秒強もガード出来るほどの過剰な耐ビーム・コーティングを施された為、図らずも大気圏突入時の高熱にも耐えうる性能を誇るようになったのだ。ビーム・コーティング層が厚すぎるために塗料の色が違って見えてしまい、スタッフが頭を抱えたのは言うまでもない。

「だから言ってるでしょ、【リ・ガズイ】とは違うって。なのに偉い人は【メタス】と【ジェガン】の合いの子みたいな【リゼル】なんか選んで……」

少し愚痴るジェーン。しかし、【リ・ガズイ】よりもコストがかさむ【リズイクス】よりも、軍上層部がローコストでスペックもなかなか【リゼル】を選ぶのは当然のことだった。

「でも、【リズイクス】は【Zプラス】くらいかそれ以上に優秀だから、ね？」

ジェーンを慰めつつ、コクピットに入るアネシス。サブジェネレーターを起動し、簡単に機体のチェックをする。

「後は、サイコミュがどれだけ助けてくれるか……ね」

コンソールをいじり、バイオセンサーの具合を確かめようとするが、反応はなかった。

「アレックス君に懐いちゃったかな、こりゃ」

しかし、アネシスは気付いていなかった。僅かながら、サイコフレームがアネシスの感応波を拾い上げ、増幅しようとしていることに。

小惑星『モウサ』。かつては『アクシズ』の居住ブロックとして存在していたが、『コア3』への攻撃に使われ、放棄された歴史を持つ。その後1度はアステロイドベルトへ退き、2年の月日を費やして軍事基地として使用できるように改修をうけていた。そして生まれ変わった『モウサ』は、再び地球圏に戻ろうとされていた。

『……遅いな』

「逸るな、カリウス。きつと彼等も、遅れるだけの理由があるのだらう」

各地に潜伏した残党軍よりジオン再興の同志を募ったが、未だ到着したのは参加を約束した者達の半数に満たなかった。

しかし、その理由も、来る者の様子を見れば予想がついた。

中には、最早たどり着いたのも奇跡と言いたくなるような艦もあり、幾度も連邦軍との戦闘をくぐり抜けてきたことを伺わせた。サイラスの予想通り、「ガンダム」と交戦した部隊の損傷度は著しく、他の部隊に編入せざるを得ないものだった。

『で、お前の博打に乗ってここまで来たが……』

通信越しにカリウスがぼやく。ダミー・バルーンで機体を隠していたのが幸いだった。

「連邦軍か。数は1隻、ただのパトロールのようだな」

『MSは【ジエガン】が3機。手緩いな』

素早く戦力の判断を済ませると、2人はフットペダルを踏み込み、MSを発進させた。

突然の敵襲に対応できず、闇雲にビームを乱射する【ジエガン】。サイラスはその内の1機、陣形から見て指揮官機とおぼしき機体に照準を合わせた。

「この一撃が、歴史を変えるものとならんことを……！」

鋭い声と共に、トリガーを引き絞る。連動した【ギラ・ドーガ】のマニピレーターがビームマシンガンを構え、【ジエガン】に容赦のないビームの嵐を見舞い、機体に無数の穴を穿った。

一方のカリウスは、【ドライセン】の機動力を活かして艦に肉薄していた。

対空機銃を次々と潰していきながら、時々迫ってくる【ジエガン】を腕のビームマシンガンであしらう。

『この程度の腕前で、我等ジオンの志を止められると思うな！』
オープンにされた回線から、カリウスの気迫が伝わってくる。

【ジェガン】が接近する。ビームサーベルを抜き、どうやら格闘戦に持ち込むつもりらしい。

『サイラス、艦を！』

「分かった、墜ちるなよ？」

軽口で答え、一気にスラスターを全開にする。【ドライセン】とすれ違う時に【ギラ・ドーガ】の腕を伸ばし、ハイタッチさせる。

「GO FIGHT!」

金属がぶつかる音に、いつもの掛け声が被る。一瞬後には、サイラスは敵艦に、カリウスは【ジェガン】に集中していた。

【ドライセン】の2本の格闘武器、ビームトマホークとビームランサーをつなげ、ロングビームトマホークにする。一見すればリーチが長い、懐に飛び込めば反撃出来ないように思える。しかし、それこそがカリウスの狙いだった。連結が出来るなら、逆もまた同じこと。懐に飛び込ませてからがカリウスの本領だ。

そして【ジェガン】は、カリウスの思惑通りに動いた。突撃し、ビームサーベルを突き出す【ジェガン】。カリウスの反応は見事だった。

ビームトマホークを左手に持ち、【ジェガン】が突き出した右腕を切り落とす。右手のビームランサーは相手のコクピットを正確に刺し貫いた。

サイラスもまた、戦艦を相手に抜群の技量を見せつけていた。

残っていたメガ粒子砲やミサイルの攻撃をことごとく回避し、単発に設定したビームマシンガンで砲座を撃ち抜く。それを何回か繰り返す頃には、最早敵艦には反撃する手段は残っていなかった。

「止めっ！」

【ギラ・ドーガ】のビームサーベルが、艦橋を切り裂く。離脱する際に、機関部に駄目押しのビームマシンガンを見舞う。

『戦闘終了か』

「だな。離脱する」

短く言葉を交わすと、2機は残骸となり果てた敵に背を向け、ス

ラスターを閃かせて去っていった。

第9話：敵襲、ギリギリの攻防戦

元々【アイリツシュ級】は大気圏内での航行は出来ない、純粹な宇宙戦艦だ。それを【アイリツシュ改級】に改装しミノフスキークラフトを搭載することで、1G環境下での強引な飛翔を可能にした。艦体構造に負担はかかるし、何よりも前例がないだけに、【アルバトロス】のクルーは皆大変なプレッシャーと戦っていた。

「バリユート接続、完了しました」

オペレーターの声も心なしか上擦っている。それを聞いてノーマンは、ようやくと覚悟を決めた。

「総員に告ぐ。こちらは艦長の、ウィリー・ノーマン中佐である。

本艦はこれより、大気圏へ突入する」

一旦言葉を切り、ブリッジ内を見渡す。正副オペレーター、通信士、操舵手、航法士。皆それぞれ、緊張感をたたえた顔付きで話に耳を傾けていた。

「本艦初の、また本級艦艇初の大気圏突入となる。これの成功の為に、諸君等の働きは必要不可欠である。各員、心してかかるように。以上だ。」

話は短く、要点のみを簡潔に。ノーマンは自身の主義に基づき、早めに艦内放送のマイクを置く。

同時に、艦内の人という人が全て、慌ただしく動き始めた。ある者は雑多な品の整理に追われ、またある者は無事成功を神に祈り。人の数だけ、己のなすべき事を見つけ、彼等はそれをこなしていた。

大気圏突入というタイミングは、常識的には戦闘を行うべきではない。戦闘に気を取られ、気付いた時には軌道の変更もままならずに燃え尽きてしまうからだ。

しかし、そんな一見すると無謀な戦術が、過去に幾度となく行わ

れてきた。

そしてまた、今回も。

「 接近する艦あり！型は…… 『3門ムサイ』！？」

オペレーターの困惑した声がブリッジに響き、すぐさま艦の画像がディスプレイに表示される。

『3門ムサイ』。渾名の通り、連装メガ粒子砲を3門搭載した、『ムサイ級軽巡洋艦』の最古の部類だ。そんな老朽艦が接近していることなど信じがたく、ノーマンを含む全員が一瞬だけ固まる。

瞬間、『ムサイ』は加速を開始した。よく見れば艦体のあちこちに損傷があり、いかにも満身創痍といったところである。

「前部メガ粒子砲、射撃用意。……今ならまだ間に合う！」

ノーマンが叫ぶ。その一言で『アルバトロス』は再動し、戦闘態勢へと移行する。

「前部主砲、照準合わせ。 大気圏突入可能なMSは出撃もありえる。パイロットは速やかに機体に搭乗せよ」

劣悪な環境下で、着々と準備を整える『アルバトロス』のクルー達。しかし敵は、そんな事を許すはずも無かった。【ムサイ級】の特徴であり、また同系列の改良型艦に受け継がれている艦橋前方のメガ粒子砲が、一斉に【アルバトロス】に向かって攻撃を開始する。

「うわっ……！」

「怯むな、命中したわけではない！」

思わず声を上げる操舵手を一喝するノーマン。細身な艦体形状が幸いし、ビームは艦の脇を通り過ぎていく。負けじと【アルバトロス】も砲撃で返し、何とか【ムサイ】を接近させまいとするが、大体の弾道は【ムサイ】とは違った方向へと進んでいった。

「やはり、実戦慣れしていないか……！」

数少ない実戦経験者であるノーマンは、内心舌打ちしていた。MSもようやく発進準備が整ったと見え、いくつかの機影がスラストを噴かして【ムサイ】に向かっていく。

しかし敵は、ノーマンの予想を上回る戦術を駆使してきた。

「後方より【ブラウゼファア】に接近する熱源あり、数は4つ……MSです！」

オペレーターの叫び声は、ノーマンを驚かせるものだった。バリユートで死角となる後方から攻めるのは、一見たやすいものである。しかし実際には、回り込んでいる最中に自機のバリユートが展開されてしまう危険もあり、運が悪ければ自機の減速が出来ずにバリユートを突き破ってしまうかもしれないのだ。

それを、何ら恐れる事なく　実際に、バリユートが展開されれば間違いなく突き破ってしまうであろう速度で　やっつのけるジオンの兵士。さらに運が悪かったのは、接近してくるMSが4機ともネオジオン製の汎用型MS、【バウ】だったことだ。運動性に富んだ機体に接近される事はすなわち、艦の撃沈をも意味している。およそ15年に及ぶMSの歴史だけでも、その事を如実に物語っている。

「対空機銃、全門開け。直掩のMS隊はどうしたか！」

艦隊司令として指示を飛ばすノーマンの言葉に遅れる事コンマ5秒、【ブラウゼファア】の対空砲が一斉に弾幕を形成し【バウ】を寄せ付けまいとする。【ジェガン】隊も各々や艦砲の死角をカバーしながら、牽制のビームライフルを放っている。

が、ここで【ムサイ】が思わぬ行動に出る。格納庫のハッチを展開し、MSを放出したのだ。その数2機。これで、戦場に存在するジオンの機体は6機となった。

「何でこんなじゃじゃ馬なのよ　！」

一介のパイロットに過ぎないアネシスは、かなりピーキーな機体特性の【リズイクス】を操ろうと必死だった。それこそ攻撃や進攻すらままならない程に、【リズイクス】は常軌を逸するような機体だったのだ。

「くおんのー！」

だが、それで諦めるアネシスではない。後輩に操れて、自分に出
来ない道理はない。そんな先輩としての意地が、アネシスを駆
り立てていた。そしてそれは、思わぬ形で叶う事となる。

「敵っ!？」

【ムサイ】から発進したMS【ガルスJ】が、【リズイクス】の
背後から迫る。機体から滲む殺気を【リズイクス】のサイコミュが
感知してアネシスに伝え、バイオセンサーやサイコフレームの作用
で認識力が拡大したアネシスはそれを正確に捉えた。

そこからは単純な流れだった。機体を反転させ、敵機をロツクオ
ンし、トリガーを引く。各部の姿勢制御用バーニアを閃かせながら
【リズイクス】はビームライフルを構え、【ガルスJ】の頭部目掛
けて収束されたメガ粒子ビームを解放する。ビームは狙いを誤る事
なく【ガルスJ】の頭部を叩き落とし、メインカメラと基幹制御系
を失ってそのまま沈黙した。

「今の感じ……。よし、いける」

1度の射撃でアネシスは完全に【リズイクス】を御し、フットペ
ダルを踏み込んで【ムサイ】に向かう。勿論サイコミュの助けもあ
るがしかし、今まさにアネシスの潜在的な資質が開花しようとして
いるのだった。

「しつこいんだよ……!」

【スタークジェガン】を駆るキースは、1機の【ザク?】と交戦
していた。

本来ならばアネシスと共に【ムサイ】へ突撃するつもりが、互い
に敵機と交戦している間に距離が開いてしまっていた。そのこと自
体はキースを焦らせることはないのだが、相手の執拗な攻撃は次第
にキースの苛立ちを募らせていく。

いつの間にかハイパーバズーカの1基は既に手元に無く、ミサイ

ルもほとんど底を尽きて、ビームサーベルによる格闘戦を余儀無くされていた。

1合打ち合い、離れ、また1合。高速で繰り広げられる戦闘は、灰色の輝きを放つ【ザク?】の方が優勢だった。

元来【スタークジェガン】は中々遠距離戦闘に適したMSであり、軽快な機動力を誇る【ザクエエエ】に格闘戦闘を挑むのは些か無謀ではある。しかしキースはその性能差を、自らの技量のみでカバーしていた。

1合、そしてまた1合。【ザク?】の強力な一撃離脱をなんとかしのぎながら、遂に一瞬の隙を見つけ出す。

止めとばかりにビームサーベルを大きく振りかぶる【ザク?】。

その腹部は、何ら防御策も見えず致命的な隙を生んでいた。

「そこだっ!!!」

一閃。ただのそれだけで充分だった。

腰部から真つ二つに切断されて宙を漂う【ザク?】を後目に【ムサイ】へ急ぐキース。大気圏突入のタイムリミットは、刻一刻と迫ってきていた。

第10話：そして、地球へと

『おいおい、このままじゃ埒があかねぞ!?!』

バリエートパックを装着したお陰で2機の【ジェガン】の動きはいつもに比べて切れが無く、しかし同じ条件で、旧型機なはずの【バウ】は軽やかな機動で【ブラウゼファー】へと迫る。もちろん【ジェガン】とて自らの仲間が乗った艦を墜とされるわけにもいかず、必死にビームライフルで牽制してはいるのだが、それも悉く避けられ続けていた。

『冗談じゃねえ、あんな化け物紛いがネオジオンだって言うのかよ!?!』

殆ど悲鳴と化した【ジェガン】1番機のパイロットの声が開放された通信回線を通じて【アルバトロス】艦内に響く。そしてそれは、未だに部屋に独り残るアレックスの部屋にも届いていた。否。アレックスの耳には何も入って来ない。自ら耳を塞ぎ、目を瞑り、何も感じようとはしないアレックスが、そこにはいた。あれから食事もまともに喉を通らず、【ガンダム】を駆る優秀なテストパイロットの面影などどこにも無い、ただの惨めな青年に成り下がっていた。

『ちょっと、【ガンダム】はもう1機いたでしょうが!?! 何やってんだよ馬鹿野郎!?!』

最早2機の【ジェガン】では抑え切れないのか、アレックスを呼ぶ怒声が艦内スピーカーを揺らす。それにもアレックスは沈黙を貫き通し、ただただ蹲るのみ。そして、遂に事は起きた。

『早く増援をよこ』

ガリっという金属が引き裂かれたような音と共に、【ジェガン】2番機の反応がレーダーから消えた。

撃墜。

誰もが一瞬で理解し、そして戦慄した。

『対空砲火、今までの3倍でいい、砲が壊れても撃ち続ける！』

『クソ、よくもヒューゴを！』

怒号や命令が錯綜する中、アレックスの部屋の扉が開かれる。

「ちよつと、少尉。一体貴方は何様のつもりですか！？ いい加減に甘えるのは止めて下さい！！」

ジェーンだ。そうアレックスが認識した瞬間には、身体が宙を舞っていた。

「っ……！？」

アレックスには何ヶ月振りになるであろう、他人の拳が彼の頬を打ったのだ。精根尽き果ててさながら幽霊のような状態であったアレックスだけに、女の非力な拳でも吹っ飛ぶには充分なものであった。

「【ジェガン】が撃墜されて、【アルバトロス】も【ブラウゼファ―】もピンチなのに、あなたは何を……！」

再び振り上げられるジェーンの拳は、最高点で後ろから黒い手に止められる。そして、いつもの草臥れたような濁声のアレックスの部屋に響いた。

「止めとけ、お嬢。後はお前さんの創った機体に任せるだけだ」

ジェーンの脇を通り過ぎアレックスの襟首を引っ掴むシグルスの顔は、いつになく無表情であった。

通路へ出て、終始無言のまま格納庫を目指す。その間も、アレックスはただ引き摺られるのみ。辿り着いた先には、戦闘で傷付きながらも未だに戦えると言わんばかりの雰囲気纏った【トランシエガンダム】が聳え立っていた。

「乗れ。発進するかはそれから決めろ」

無重力区間であるが故にアレックスの体は簡単に放り出され、長年の訓練で仕込まれた技は思考を待たずに己をコクピット内に滑り込ませる。

「ッ!？」

アレックスの目が大きく見開かれる。そして、サイコミュが【リズイクス】のそれよりも鋭いと直感した。

戦場の全てが恰も俯瞰しているかの様に頭に流れ込み、一気にそれらを理解する。

そして、アレックスの瞳に光が宿る。

「使える武装の説明を。【トランシエ】って、この間壊れてましたよね」

久々に発した声は若干掠れているものの、力無いものではない。それを聞いたシグルスの頬にも笑みが浮かび、憎まれ口で答える。

「ビームマシンガンとバルカン、ビームサーベルだけだ。ライフルとシールドは【ジェガン】のもあるが、サイコミュに頼って漸く復帰するようなヘタレ如きにくれてやるものかよ」

「要りませんよ、それくらいなら。この機体、ファンネル持ちでしょう?」

しかしアレックスも負けじと言い返し、ノンオプションのまま機体をエレベーターに乗せてカタパルトへと移動する。

【トランシエ】の機体が艦外へその姿を現した瞬間、様々な声がスピーカーを揺らす。

『遅えぞ、馬鹿野郎!』

『【ガンダム】なんだから、一発キメて来いよ!』

『後できつちり落とし前は付けさせてもらうぜ?』

それら1つ1つに答える暇も無く、アレックスは操縦桿を握り締め、有らん限りの声を張り上げる。

「人殺しを肯定したくはないけど、これは戦争なんだ。やらなくちゃ、みんながやられるだけ……。遅くなってすみません!アレックス・レイバード、【トランシエガンダム】。行きます!」

普段はあまり好きでない部類に入るカタパルトのGが、今日だけは心地良く感じられた。

いざ戦場に出てみれば、格納庫で脳裏に閃いた感覚と全く同じ。

脅威対象を割り出さずはそれに向かう。【バウ】が2機で【ブラウゼファー】を攻撃しようとしており、それを食い止めていたのは今や1機となり、片腕すら失った【ジェガン】だった。

『来たな、クソガキ。後は押し付けてやるから、何とかしやがれ！』
そう言い放つと、【ジェガン】は【トランシエ】に背を向けて【ブラウゼファー】へと帰艦する。

【ジェガン】が退いた事で空いた隙間にねじ込むかのように【バウ】の1機が迫る。落ち着け、と念じるアレックスの思いも通じる事は無く、【トランシエ】はサイコミュが拾ったアレックス自身の防衛本能に従ってバルカンを斉射した。

ガンダリウム合金を主に構成されたシールドは、当時最高の硬度とは言えそれは絶対ではない。【バウ】が持つシールドは忽ちその形を大きく変形させ、ただの鉄屑へと成り下がった。勿論の事ながら【バウ】も負けじとビームライフルを連射し始め、【トランシエ】を撃墜せんとする。

「ビームマシンガン……腕部固定のあれか」

シグルスの説明を想起しながら【バウ】から放たれる光条を回避し、セレクターを操作すると武装変更の表示がディスプレイの隅に小さく映る。それを確認してトリガーを引くと、立て続けに【バウ】の発射してきたそれとは明らかに異なるビームが連射される。しかし取り立てて照準を定めていたわけでもなく、ビームは【バウ】の脚部を擦過するに留まった。

【バウ】は尚も迫り来る。接近を知らせるアラートがコクピット内に鳴り響き、アレックスもクロスレンジでの戦闘に備えて武装変更の準備をする。

「来い……！」

苦手な近接戦闘が始まるうとしていても関わらず、不思議と焦りは無い。

ビームライフルを撃ってくる【バウ】は不規則な軌道で接近し、【トランシエ】を墜とそうとする。アレックスは迷わなかった。ビームサーベルを抜刀させ、一気に【トランシエ】を呐喊させる。僅かな戸惑いを見せる【バウ】の左腕を斬り落とし、よろめいたところに隙を見出しは蹴りを放つ。サイコミュはアレックスの意思を正確に読み取り、機体に反映させていた。

「いけえっ！」

ビームサーベルを持った右腕を構え、頭部に照準を合わせる。精密射撃用のスコープすらも使って放たれたビームは、狙い過たずに【バウ】の首から上を吹き飛ばした。

「あと1機！」

【バウ】が行動不能になったのを確認すると、【ムサイ】の護衛に向かったもう一機の【バウ】を追うべくアレックスは【トランシエ】を噴進させた。

「だーもう、しっつこい……！」

アネシスが駆る【リズイクス】は、アレックスの予想通りに【ムサイ】の護衛にやってきた【バウ】の相手をしていた。此方はアレックスの撃墜した機体とは違い細かな機動を駆使しての一撃離脱戦法をとり、射撃戦を得意とするアネシスは苦戦を強いられていた。

ビームサーベルが一閃される度に【リズイクス】のシールドは傷付けられていき、当たりどころが悪ければ次で両断されんばかりであった。

「いい加減当たりなさいよね！」

ビームライフルを撃ち放ち、ひたすらに【バウ】を狙うが、光条は【バウ】に当たりもしない。パイロットとしては優秀な射撃戦闘能力を持っているという自負が今回は仇となり、アネシスは焦りを隠せずにいた。

そしてまた、【バウ】が突撃して来る。ビームサーベルを真っ直

ぐに構えて突っ込んでくる機体に、今度こそはとライフルを連射するアネシス。

シールドこそ破壊したものの他所には大したダメージを与えられず、【バウ】は勢いを殺す事はなかった。

「私にコレを使わせるなあ！」

コレ、の一言と同時に武装を切り替え、ゼロコンマ1秒未満のタイムラグを挟んでトリガーを引く。機体は入力された情報に従い、シールドを投棄した左手でビームサーベルによる居合いを敢行した。

【バウ】も負けてはいない。真っ直ぐに構えたビームサーベルを横薙ぎに振るい、ビームサーベルを持った【リズイクス】の左腕を切り落としてかかる。しかし、それこそがアネシスの狙いであった。「ライフル撃てれば、こっちのものね！」

左腕マニピュレータ損壊。だがそれと引き換えに、【リズイクス】の右手に保持されたビームライフルから放たれた必殺の光弾は、確実に【バウ】のコクピットを穿っていた。

「敵MS隊は全て沈黙。後は【ムサイ】だけです！」

オペレーターの声が艦橋に響く。【ムサイ】を撃沈するのも時間の問題だと誰もが確信したその瞬間、【アルバトロス】【ブラウゼファー】両艦に激震が走った。

「何だ……バリュートか!？」

何というタイミングの悪さ。思わずノーマンは歯噛みし、アームレストを拳で叩く。

「艦前部メガ粒子砲、照準合わせ。MS隊は収容急げ、バリュートが損傷している機体も居るはずだ！」

艦外が徐々に赤く染まっていき、【スタークジェガン】が帰艦する。【トランシェ】のバリュートに異常は見られず、またノンオブションで大気圏突入が可能な【リズイクス】もボロボロになったとは言えシールドを回収した為に変形も可能で、両機が帰艦する事は

ない。

「射線軸上に味方機なし。メガ粒子砲、敵艦に照準」

淡々と報告する砲撃手の目には、明らかな気焰が渦巻いていた。MSが主役となって久しいこの時代は自分の出番が全く無い、と以前に愚痴っていたなと思い出しながら、ノーマンは今日1番の声を張り上げる。

「前部メガ粒子砲、目標【ムサイ】。撃てーっ!!」

指示が飛ぶや否や、砲撃手の指はスイッチを押し込み、【アルバトロス】の前半分に設置された2門の連装メガ粒子砲がMSのライフルとは桁違いな出力のビームを放つ。

着弾。【ムサイ】独特の後部左右に張り出した機関部は完全に破壊され、核融合炉の崩壊は艦体そのものまで呑み込んで巨大な火球を生み出した。しかしそれが、【アルバトロス】に僅かな隙をもまた生み出してしまっていた。

「ミサイル接近、目標は……【トランシエ】です！対空火器使用不能！」

オペレーターの声に引つ張られるかの様に首を回すと、振動で照準も定まらずにビームマシンガンを連射する【トランシエ】の姿があった。

「当たらない……!!」

ぶれる照準にぶれる腕部。火線はミサイルを捉えきれずにただ接近を許してしまっていた。よしんば機体への被弾は避けられても、バリユートを破られてしまつては一巻の終わりだ。【ガンダム】も万能ではない。

1本のピンク色の光が1基のミサイルを貫く。【リズイクス】だ。半ば死にかけたリーダーで判断すると、アレックスは1つの賭けに出た。

コンソールに手を伸ばし、幾つかのスイッチを操作。すると数秒

も経たない内に、あろうことが【トランシエ】からバリユートが強
制排除された。

「先輩、分かってくれてますよね……？」

念じる様なアレックスの声に応えるかの如く、ウェイブライダー
形態に変形した【リズイクス】が機体上面を【トランシエ】へ向け
る。それを確認すると、撃ちっ放しのまま直進するミサイルを避け
て【トランシエ】の側面に設置された姿勢制御用バーニアを最大出
力で起動する。強引な機動ながらも何とか【トランシエ】を【リズ
イクス】に乗せ、ほうと息を吐いてヘルメットを取るアレックス。
接触回線が繋がり、装甲を挟んだ向こう側からも安堵の声が聞こえ
てくる。

『あんなサーカスみたいなき、やるなら事前に相談してよね』
相手には見えないだろうが、アレックスは微笑んで頷いた。

【ブラウゼファア】は火器群の損傷著しく戦線を離脱した。【ア
ルバトロス】の深紅の艦体は大气との摩擦でさらに赤くなり、その
横を併走していく【リズイクス】と【トランシエ】。朱に染め上げ
られた2機と1隻が向かう先には、ただひたすらに蒼い地球の風景
が広がっていた。

第11話：癒えない傷

紅の巨艦が空を飛ぶ。半世紀前には誰もが不可能だと思っていた光景が、宇宙世紀の技術で描かれていた。

【アルバトロス】は予定航路を大きく逸れてインドネシア付近に降下し、今はただ全速力でアラビア半島へと向かっていた。定刻通りに到着出来ないと判断した上層部から、掃討任務を先に遂行せよと通達されたからだ。

艦と上層部でもこうした一悶着が起こっていたが、艦内でもちよつとした騒動が起こっていた。

「お断りします。私はまだ、この【リズイクス】が終わっていないとは思えません」

ジェーンが、ノーマンに声を荒げる。アレックスが【リズイクス】から【トランシエガンダム】への乗機変更を命じられ、それが腑に落ちないのだ。ビームライフルもシールドも無く、地上では無用の長物であるファンネルを積んでいる【トランシエ】に比べれば、確かに【リズイクス】はまだまだ損傷は軽微なものだった。基本スペックもそこまで差があるわけでもなく、むしろライフルがあるだけ【リズイクス】の方が良い機体であるかもしれない。

「いいか中尉、これは命令だ。【リズイクス】のデータはコロニー内試験で既に出揃っているが、【トランシエ】はそうではないんだ」だがしかし、ジェーンの言葉も命令の前にはただの我が儘でしかない。ノーマンも、話は平行線を辿ると分かっているようが構わずに苛立った様子でジェーンに言い返し、艦長室の中に険悪な空気が漂う。【リズイクス】の損傷は軽微。だがそれは、損傷の有無で考えれば間違いなく有の方だった。

左マニピュレータはごっそり持っていかれ、またシールドも多数の被弾や大気圏突入の過熱や衝撃に耐えきれずに使い物にならなくなっていた。シールドの代替は利かず、マニピュレータも予備パー

ツが無い為に損傷して使い物にならなくなった【ジェガン】の物を無理に接続している状況だった。勿論それらは機体の動作を不確実なものにしており、特に格闘攻撃に於いての反応速度の低下が著しいものとなってしまっていた。

それに対して【トランシエガンダム】は、決して軽微とは言いがたい損傷を被っていた。アレックスが乗る前の損傷　胸部装甲の凹みや携行武装の欠損に加えて、バリユートを強制排除した時に出来たスラスターの歪み、無茶な機動で焼き付いた姿勢制御用バーニア、数秒とはいえ大気の高熱に晒されて瞬く間に消え去った全身の耐ビームコーティング、熔解しかけた装甲。格納庫に入ってきた2機を見て、ジェーンは【リズイクス】の損傷を咎めるより先に、満身創痍の【トランシエ】に悲鳴を上げてしまった程だ。

それでも尚、【トランシエ】のテストを強行しようとする上層部の意図が全く理解出来ず、ジェーンは小さな溜め息と共に艦長室から出て行くしかなかった。

「ほら、急がんとまたいつ出撃があるのか分からんぞ！　まだ使えるパーツは【リズイクス】に回しとけ！」

格納庫にいる人々は艦長室で起きている事など露とも知らず、急ピッチで【リズイクス】の整備を進めていた。あまりにも違いすぎる両手の反応速度を少しでも改善しようと、アネシスやアレックス立会いの下で試行錯誤が続けられていた。補助用のプログラムを割り込ませたり、一部のパーツを【トランシエ】の予備パーツから流用してスペックの底上げを図ってみたり。しかしそんな整備班の必死の努力も、1本の艦内電話によって空しく打ち碎かれる事となってしまう。

「こちら格納庫、整備班長。……はあ、【トランシエ】を優先！？　響き渡ったシグルスの声に、格納庫内の全てが静止した。

「いやそりやないですぜ艦長……うっわ、また上層部がちよっかい出して来たんスカ？　最悪なパターンですなあ。整備班一同、納得しかねると伝えて下さいよ。……ようしお前等、食いっぱぐれたく

なかったらとつとと」

シグルスの言葉から、整備士達は何があつたかを悟る。そしてシグルスが号令をかける頃には、誰もが憤然とした表情で【トランシエ】の整備を開始していた。

「コウ、大丈夫なのか？」

ようやく医師から解放され、満足げに肩を回すコウにキースが問う。かつてはガンダムタイプを乗り継いで激戦を潜り抜けてきたキースとはいえ、今や三十路を迎えてしまっている。いくら鍛えていようが衰えが来始める頃ではあるので、それが気になっていたのだ。「俺は大丈夫だ。早く復帰して、今まで休んでいた分を取り戻さないとな」

「その事なだけどさ、実は」

「コウ・ウラキ、チャック・キース、アレックス・レイバード、アネシス・フラメル、テール・ヴィンセント。以上5名は至急艦長室に来られたし。繰り返す、先に述べた五名は至急艦長室に来られたし」

やる気に満ちたコウの声は、キースの耳に痛かった。重い口を開き、ある真実を伝えようとするキース。しかしそれを、1本の艦内放送が遮った。

「何だ……？」

「分からない。とりあえず、行つてみるか」

MSパイロット4人とその他1人。元オークリー組の全員が呼び出された事に首を傾げながらも、コウとキースは艦長室へ向かつて走った。

艦長室に着くと、そこには既にアレックス達からなる若手3人と、不機嫌な顔をしたジェーンが待っていた。見れば、アレックスとアネシスの顔も若干引き攣っている。次々と訪れる不思議な出来事に、

コウは疑問を隠せなかった。

「どうしたんだ、お前ら？ 何かあったのか？」

次の瞬間、その言葉を待っていたと言わんばかりの剣幕でジェーンが語りだした。

「【トランシエ】のテストが続行されるそうです。大破寸前なのに、上層部が強引に決定を下して。……全然分かってないですよ、あんなジャンク寸前の状態でテストを強行したら機体が保つはずがない。非常識もいところ、正気の沙汰じゃありません」

少々手荒な表現を交えながらも一応は状況を理解出来るようなジェーンの説明に納得行ったのか、コウはそれまで全くと言っていいほど一同の内に入ってこなかった部屋の主 ノーマンに目を向けた。しかし、ノーマンの視線はコウを捉える事は無い。机に俯いたまま、どこか憂いを感じさせるような頭を向けるばかりであった。

「艦長。パイロット以前に、貴方自身【トランシエ】が戦える状態ではない事が分かってるだろう。逆に、【リズイクス】ならまだ大丈夫なはずだ。違うか？」

項垂れたままのノーマンが答える事は無い。コウは返答を諦め、更に話を続ける。

「怪我して退陣していたとは言え、一応俺がMS部隊の指揮官だ。原則は上層部からの指示に従って動くが、全く現地の意思が尊重されないわけじゃない。部隊の再編成、俺に任せてくれないか？」

「よし、やってくれるな？」

コウの申し出を聞くや否や、にやりと笑みを浮かべるノーマン。艦隊行動ならいざ知らず、部隊運用に関してはパイロット達の動きが間近に見られない為にコウ等ベテランに劣ると自覚していただけあり、出来るだけその手の事はその手の人々に任せておきたかったのだ。

「了解。よしお前等、もう1度編成を組みなおすから、30分後にブリーフィングルームに集合な」

ノーマンの企みをすっかり把握したコウは、少し肩を竦めるに留

めて艦長室を後にする。

コウが去ったのを見届けると、ノーマンは視線をテールに向ける。テールもノーマンの方に姿勢を正して、これから自分に関して話があるのだという事を悟っていた。

「テール・ヴィンセント。君は艦を下りるかね？」

次の瞬間、ノーマンの口から放たれた一言に艦長室にいる全員が凍り付くのだった。

第12話：その力、誰が為に

南アジアに入ると白なのか黄土色なのか見分けの付かない大地が続く、太陽からの灼熱が紅い艦を焦がさんばかりに照りつける。それとは対照的に、艦内　艦長室の空気は依然として凍りついたままであった。

既にアレックスやアネシスは退室してから5分が経つが、艦長室は未だに沈黙に包まれていた。

「何故……ですか？」

唾を飲み込み、掠れた声で問うテール。ノーマンは、苦虫を噛み潰したような表情でそれに答える。

「最新鋭の試作機が配備された艦に、ジオンにいた人間は置けん……だそうだ。建て前ばかりを気にする者の屁理屈だらうな」

諦念、悲哀、憤怒。様々な感情が狭い部屋を暫し渦巻き、ノーマンの溜め息でそれは一旦動きを止めた。

「正直な事を言うと、私は上層部からの命令に従うつもりはあまりない。しかしそれとは別に、君に退艦を勧める理由はあるにはある」
今度は、テールを真っ直ぐに見据えて言葉を放つノーマン。理由を言うのを一瞬躊躇うようにも見えたが、直後にはその続きを口にしていった。

「有り体に言ってしまうえば、イレギュラーな乗員に払えるだけの給料は無いのだ。命懸けで只働きというのは割に合わんだろう」

真剣な表情で語るノーマンに対し、テールはあっけらかんとした様子で答えた。

「え、そんな事気にしてたんですか？ 私お金なんてそんなにいらないうですけど……」

衣食住さえ保証されていれば、テールはそれで良かったのだ。その事に気付き、ノーマンの口からは今度は安堵の溜め息が漏れる。少ない材料で出来る限り美味しく栄養バランスに優れた料理を作る

テールの技量はなかなか貴重なもので、食事による乗員のストレス緩和・解消や若干ながら食料費の削減にも貢献していただけに、上層部からの命令に逆らっても艦に残しておきたかった。最大の懸念材料であった給与についてもこれで解決し、後は事務処理のみで何とか出来る問題だけ。

相変わらずの炎天下を艦は往く。強い日差しが功を奏したか、艦長室の氷のような緊張感も、今はすっかり解けきっていた。

「た、隊長おおお！ラルフ隊長おおお！！」

バギーがスリップしながら停車する音が響き、1人の青年がテントに転がり込んで来る。ラルフと呼ばれた温厚そうな男性は、そんな青年の慌て振りにも動じる事なく、笑顔で問うた。

「どうしました、そんなに慌てて。息子さんが産まれたという話なら昨日聞きましたよ？」

「そうなんですよ。いやあ、1日経ってもやっぱり可愛くて可愛くて……って違いますよ！連邦軍の艦が近くに来てるんです！！」

少々ズレた物言いに全力で引っかけかき、相手を崩す青年。若い父親の素顔を覗かせた直後には、本気の叫びで敵の接近を報告する。

その言葉に、ラルフは微妙に眉を顰めた。連邦軍に気付かれた。

つまり、ここもジオンの残党が潜む拠点として認定され、ゲリラとして掃討の対象になったという事だろう。逸る青年は、慌ててテントを後にしようとする。

「俺、みんなを呼んできます。戦わないと、関係ない人まで巻き込まれる……！！」

待て、と手で制すラルフ。何故戦うか、という問いには簡単に答えられる。では、どうやって戦うか。それが、この集団のネックだった。その事に気付いたのか、青年もテントを出る寸前で足を止めて俯く。

【ディザート・ザク】も【ドム・トローパーン】も廃棄され、残っていたのは前線で運用されない事で故障を免れていた【アイザック】に【ザクタンク】、【ガルスJ】の格闘戦特化仕様である【ガルスL】くらいなものだ。どれも時代遅れな代物ばかりで、ともすれば同数の【ジェガン】を相手に一方的に駆逐されてしまうかも知れない。

ただ静かに暮らしたい一心で集まりながらも、連邦は容赦なく掃討部隊を差し向けてくる。ならば取る手は一つ。

「【アイザック】を起動して下さい。ギリギリまで情報を収集し、それから対策を練ります」

軽く溜め息を吐くが、既にラルフの目には迷いは無かった。

【アルバトロス】艦内放送で、今回の作戦目標が伝達された少し後、格納庫の空気は少なからず重くなっていった。

「よりもよって砂漠デザートの荒鷲イーグルかよ……」

ぼやくのはシグルス。かつてはジオン公国軍に属していた為に、敵ラルフ・ヴィッツレーベン中佐の事はよく知っていた。そして、敵の思いも痛い程に分かる。

元々彼は、そこまで戦闘をしない知将の類いの人間だ。「言われた通りに動けば作戦は終わる」と兵が言うような男だ。その実力は侮れない。時には自身もMSを駆って前線に赴き、自らをも駒として扱い作戦を遂行する。

そんな典型的とも言えるジオン軍士官らしいラルフの姿に、シグルスは惹かれた事もある。ジオン特有の『男気』が、ラルフにはあった。

しかし、今は彼は自分の敵だ。今の自分の仲間が、かつての自分の仲間を討つ。かつての自分の仲間が、今の自分の仲間を討つ。両方の可能性に気付き、シグルスはただ天井を仰ぐ。

いつもは豪快なはずの整備班長の憂鬱そうな表情に、整備士達は何も声をかけられない。【ジェガン】のコクピットで待機するパイロットも、思わずハッチを閉じてしまった。

【リズイクス】の修復も、【トランシエ】の修復も中途半端なまま、【アルバトロス】は砂漠を進む。頼みの綱は、アネシスが駆る【アトラスト】と、キースの愛機である【スタークジェガン】。

相手が正規軍ではなくゲリラ集団である事が、今のヴァルハラ隊には幸運であり、しかしまた不幸でもあった。

「単艦、そして重力下でも運用可能な【アイリツシュ】ですか……。なかなか厄介な相手になりそうですね」

【アイザック】で集められたデータを元に、テントで1人作戦を考えるラルフ。

自身が乗る予定の【ガルスL】には、殆どと言っていい程に射撃兵装が装備されていない。後方支援が可能な機体は【ザクタンク】のみ、それもあまり期待出来たものではない。【ザクタンク】の装備は背部に無理矢理据え付けたロケット砲が1門のみと、前線に出すにはあまりに危険すぎる。

残るは先程から偵察に使われている【アイザック】。これも、【マラサイ】から流用されたビームライフルとビームサーベルがそれぞれ1つ。電子戦闘用の装備が肥大化し、機外に飛び出している以上はこちらも自衛用に火器を装備したと考えた方がよさそうだ。

マトモに戦う為には、相手の心理を突くしか他に方法は無い。そして、その戦法を可能とする為に戦力として運用出来るのは、やはり【ガルスL】以外に存在しない。

「また面倒な事になってきましたね……」

そうは言うものの、ラルフの頬には微笑みが浮かぶ。

司令部と名の付くモノこそ粗末なテントだが、小さなオアシスの

周りには町も出来た。それは連邦も知っているはずだが、今回こうして来襲した以上は完全に町を破壊する魂胆と見て間違い無いだろう。武器を持つ身としては、町を、人を守るといふ義務がある。

昔から、英雄と呼ばれる事は苦手だった。彼の中での英雄とは、誰も死なせず、誰も殺さない存在だ。そして、彼の作戦に従事した者の中には戦死した者もいれば、自らの手で敵を討った事もある。賛辞と現実とは、彼の中ではかけ離れたものだった。

しかし、今回は違うかも知れない。敵味方を含め、今回の戦闘では、誰も死なせない。準備は既に整っている。後は、ラルフの想像しているような敵が来るのを待つだけだった。

改めて、自分の乗る手筈の【ガルスⅠ】を見上げてみる。

基本的なデザインは原形機である【ガルスⅡ】と似通っているが、格闘戦に特化した事で影になる部分の装甲はやや薄く、全体的には鋭角的なシルエツトになっている。肩部や腰部の装甲は大胆にカットされ、大幅な軽量化を実現している。

胸部に備えられていたミサイルランチャーはバルカン砲に換装され、フィンガーバルカンはオミットされた。しかし、最大の特徴がマニピュレータにある事に変わりはない。フィンガーバルカンこそ存在しないものの、アームパンチの機構はまだ残されていた。標準的な5本指マニピュレータに比して指先が異様に鋭いそれは、アームパンチと併せて敵機の装甲を突き破るもの。バルカンで敵を足止めして懐に飛び込み、一撃必殺の貫手を繰り出す事が、本機の基本戦闘スタイルだ。

本来であれば【ガルスⅢ】や【ズサ】等の援護があつてこそ成り立つ戦法だが、今回はそれは望めない。むしろ、今回はそういったものは必要ない。

ラルフの、孤独な戦いが始まる時は近い。ともすれば最期の乗機になるかも知れない【ガルスⅠ】は、日光を浴びて鈍い金属光沢を放ちながら立っていた。

第13話：疲れ果てたモノ達

「MSが単機でだと？ ……アンノウンなのか!？」

艦橋の正面モニターを凝視するノーマンの目には、しっかりと『UNKNOWN』の文字が刻まれていた。

「外観からは【ガルスJ】の系列である可能性が最も高いですが…。ヒートサーベルらしき物以外の装備は不明。装甲もかなり削られている事から判断すると、格闘戦闘に特価したか、簡易量産機のものどちらかだと思われます」

オペレーターの報告を受け、ノーマンは低く唸る。戦力の正確な把握も出来ず、更に相手の意図も不明。このような状況では手の打ちようがない。

「迂闊に手を出すなよ。……砲管制、システム起動。ただし照準は付けるな、数ミリも動かすんじゃない」

険しい顔付きで敵を睨むノーマン。彼の視線の先には、【グフ】を彷彿とさせる蒼に染め上げられた機体が静かに立っていた。

「【リズイクス】【トランシエ】共にヤバイ。ブリッジから聞いたが、相手は格闘機っぽいんだろう？ 一発かましてみるとしても、今の状態で勝てると思うか？」

シグルス指揮の下、昼夜を問わず、全力で修復作業が続く二機のガンダム。しかし純正パーツが底を突き、【ジェガン】や【アトラスト】といった下位機種の子備パーツを調達しても、未だに各機固有のパーツを使わざるを得ない箇所は修復は不可能。【リズイクス】は変形するにもフレームが保つのかどうか怪しくなってきたており、

【トランシエ】も携行武装が欠損。更に今の【トランシエ】には腕部ビームマシンガン用の予備エネルギーパックも存在しない為、実質的に使用可能な武装はビームサーベルとバルカン砲のみとなっていた。

「【トランシエ】は確実に無理か……。【リズイクス】は変形させなければ、ライフルを【アトラスト】から借りて出せるんじゃない？」
「いや、無理だ。マニピュレータが【ジエガン】な上に、電装系も随分とジャンクパーツを横流ししてやつと動いている以上、いくらサイコミュの補助があってもロクに戦えたものじゃないだろう」
アレックスの考えを、コウが否定する。アレックスはその言葉に頷き、パーツ流用までしてようやくその形を留めていられる機体を眺める。グリーンのカメラアイは、今は何も語らない。別の機体のパーツを強引に繋がれ、本来あるべき姿ではない事が癪に障ったのだろうか。

「【アトラスト】は出せるわよね？ 2番が無いのと、1番3番は宇宙の【ブラウゼファー】だから、フラメル中尉は4番に乗るし、四機分の予備パーツなんか余って当然なんだから。キース大尉の【スタークジエガン】にも、新品のライフルを回しておいて。バズーカは予備も無くなっちゃったし、もし本体があっても予備のカートリッジが無いしね」

シグルスが2機の【ガンダム】の整備修復に専念している間、他の機体をジェーンが担当する。

満足に休める者はいない。満足に戦える機もない。少しでも動けるならば誰であろうと闘わねばならないのが、今の【アルバトロス】の苦しい現実だった。

「流石にこの【ガルスシ】を見るのは初めてのようですね……」
【グフ】のそれをサイズアップしてマニピュレータの規格に合わせたヒートサーベルを片手に持ち、静かに紅の艦を見上げる。

非戦闘員も含め、小さな街からは全ての人と物を避難させた。砲弾や載せるモノが無くなった為に放置してあった、フルセットの【ギャロップ】が役に立ってくれた形だ。生き延びられた時の為に、

自身の分の【ド・ダイ?】も用意してある。

「今日の今日まで皆が大切にしてきた、平和と団結の象徴がこの小さな街なんです。壊させはしませんよ、連邦軍」

己の正義と守るべきものを改めて確認すると、ヒートサーベルを構え直す。

「アシノウン目標、戦闘態勢に入りました」

オペレーターの緊張した声がブリッジに響く。現在の艦の高度はそれほど高くはなく、MSがスラスタを起動してジャンプすれば簡単に到達出来るようなものだ。格闘戦闘用の機体ならば、バイタルエリアに直接攻撃をかけてこない道理はない。ノーマンは軽い舌打ちの直後に指示を出す。

「機銃、安全装置解除。向こうが飛んだら撃てるようにしておけ」
目的、所属、共に不明。分かっている事は、シグルスの予想が当たっていればという条件付きだが、敵はなかなか手強いという事くらいか。

睨み合いを続ける中、先に動いたのは【アルバトロス】だった。動いた、というより、動かざるを得ない状況に立たされていた。

「冷却水循環パイプに亀裂発生、艦内浸水！」

けたたましい警告音や真っ赤な非常灯の表示、ちよつとした振動と共に、機関部から通信が入る。大気圏再突入時に蓄積されたダメージが、今になって響いたか。理由を考える暇など無く、ノーマンの指示が発せられる前には機関士や航法士達が処理に当たる。

「機関出力低下? ならとつと非常電源立ち上げてよ。生命維持よりもクラフト優先だ、墜落なんかさせねえつての！」

「隔壁を余計に二つ落とします。危険性は無いですがエアロック代わりにおきますんで、念の為に耐放射線防護スーツ着た方から補修作業に向かって下さい！」

ここは、正規部隊ではない。それが故に、一般の訓練では考えも付かないような事態にも対応出来る、ある意味ではプロフェッショナルな者達の集まりだった。これで、戦闘技能がもう少し高ければ、ノーマンの脳裏にはそんな思いが去来し、艦がゆっくりと降下する中で溜め息を吐いていた。

「落ちてるじゃねえか、馬ッ鹿野郎！ MS全機、パイロット乗っけた奴から外に放り出せ！！」

艦の異常に対しては、格納庫の反応も早かった。吼えるシグルスのすぐ側を、ありったけの武装を抱えた【ジェガン】が小走り気味にカタパルト・デッキに進出し、敵機とは逆の方向に飛び降りていく。これで、大体50t。艦を少しでも軽量化するには、艦載機も含めて積み荷は下ろすのが当然だ。MSの腕は作業用重機としても役に立ち、続くアネシスの【アトラスト】は、予備機材を詰め込んだコンテナを担ぎ上げる。限界ギリギリの重量にガンダリウム合金系マテリアルを使用したムーバブル・フレームが悲鳴を上げると【スタークジェガン】でキースがサポートし、それ等の後にコウが【トランシエ】を降下させる。

「【リズイクス】と【トランシエ】も下ろしますよね？」

「【トランシエ】はとっくの昔に下りてる。【リズイクス】本体だけがいいから、とっととやれよ！」

待機ボックスで仮眠を取っていた為に少し遅れて来たアレックスの問いに、威勢良く返すシグルス。非常時の格納庫では彼がトップであり、そういった時には半端な佐官よりも頼りになるのが整備班長としての役目だと信じて疑わないだけじゃあなかった。

「もう40m切ってるよ！？ 【リズイクス】出します！」

予想よりもかなり低くなってしまっている高度に驚きながら、何とか【リズイクス】を起動してデッキから飛び降りるアレックス。修繕中にも関わらずいきなり大きな負荷をかけたせいで、さながら老体のように脚部の関節が軋む。【トランシエ】も似たようなもの

らしく、アレックスが目を向ければ、【アトラスト】等が運んでいたコンテナの側で座り込んでいる。

「ロクに試験みたいな事やってなくて、戦闘と故障ばかり……大丈夫なのか、この部隊」

天を仰ぎ呟くアレックス。着任の時も何か引っかけたが、ひたすら地味な作業を繰り返す他の試験隊とは違うこのヴァルハラ隊が、名目上は試験隊となっている事を今更のように思い出していた。

第14話：砂漠の只中にて

砂漠では、通常MSの設計時に想定されていない、もしくはあまり重視されていない敵が2つ現れる。

それは、遙か昔から砂漠が極限の地である事の証拠であり、また、人類が未だに完全に克服しきれない自然の驚異でもあった。

ヴァルハラ隊は今、その二重の責め苦に晒されていた。特に、その拷問の1つは、【リズイクス】に集中していた。

砂と、熱である。

変形機構を有する【リズイクス】だけではなく、防塵処理を嚴重にはしていないもう1機も　つまり、【リズイクス】と【トランシエ】の2機は今、【アルバトロス】のカタパルト・デッキに腰掛けていた。残るキースの【スタークジェガン】とアネシスの【アトラスト】はビームライフルを構え、いつでも敵機に向けて発砲可能な態勢に入っていた。

【アルバトロス】整備班の作業量は、普段の倍以上を強いられている。艦内では機関冷却系統の修復と浸水箇所交換・修復、艦外ではMSの関節部に入り込んだ砂塵の除去。特に、MSの整備に関しては、艦内施設にも悪影響を及ぼす可能性があり、艦外での作業となっていた。

持ち運び可能な機械は少なく、それらの大半が【トランシエ】に使われている今、【リズイクス】の整備に使われているのは、人の力のみであった。

「ハタキはねえだろ、ハタキは……。しかも、俺はスタントマンに就職した覚えはねえぞ」

軽く愚痴りながら、シグルスが【リズイクス】の足首関節を叩く。機体は、カタパルト・デッキを椅子の座面にするような形で座って

おり、その為にシグルスは、ワイヤーを使って宙にぶら下がりながらの作業を行っていた。

「いや、充分落ちますって、コレ。それに、高所作業車なんて出そうにも、地面が安定してなくて逆に危険だし」

その上で、粗方除去の終わった膝関節をウエスで磨きながら、アレックスが言う。実を言えば、彼はアネシスの私物であるハンドドライヤーも併用しており、その為に作業が早めに終わったのであるが。

彼等の隣で、【トランシエ】が立ち上がる。流石に機械を使っただけがあり、ほぼ全て人力で行っている【リズイクス】よりも早く整備が完了したと見える。

【トランシエ】はカタパルト・デッキを去り、己の収まるべきハンガーにその身を固定する。それと入れ違いになるように、ノーマン艦長の姿がデッキに現れた。

艦長は真っ直ぐに【リズイクス】の方に近付き、シグルスを目で呼ぶ。それに頷き、シグルスはハタキをアレックスに預けて【リズイクス】の元を去った。

「機関冷却部、整備完了。班長、チェックお願いします」

若い整備士が、額に浮かんだ汗を拭いながら申告する。それを受けたシグルスは、応と一声上げてから整備された箇所をチェックにかかると。

ノーマンも、普段であれば、シグルスにはMSの整備に当たっていてほしかったのだが、艦の動力部という重要な箇所が損傷してしまっただけでも言うていられなかった。それに、今目の前にいるMSの正体も掴めない今、MSが動けなくとも【アルバトロス】さえ動く事が可能であれば、安全圏まで離脱出来る可能性もある。幸いにも艦載機の内【アトラスト】【ジェガン】【スタークジェガン】の3機は健在であり、防衛戦闘程度ならばこの機体だけでも何とかなりそうなものであった。

「よおつし、上等上等。これで注水すれば完璧だな」

シグルスが嬉しそうな声を上げる。自身の負担が減る事もあるが、整備班のメンバーが成長してきているというのが、シグルスに喜びを与えている主な理由だった。

しかし、それとは対照的に、ノーマンの顔は浮かない。短時間とは言え、金属容器に入れて、熱砂や甲板の上に直に置いてしまった水はどうなるか。確実にいくらかは蒸発してしまった事だろう。

生活用水を削っても、その分の埋め合わせになるとは思えないし、何よりもそれは砂漠の真ん中では禁じ手と言える危険な行為でもある。

「行くしかない、か……」

機関の再度チェックを行っているシグルス達の後ろで、ノーマンは眉間に寄った縦皺を揉みほぐしながら呟く。と同時に、任務の1つを放棄する事を心に決めたのであった。

「オーライオーライ、はいーストップ。気を付けて接続してくれー、1滴でもこぼしたら大尉の分の飲料水を削るぞー」

艦の機関部付近という不安定な場所が場所だけにかなりキツイシグルスの脅し文句を受けながら、コウは【アトラスト】で冷却部の注水口にパイプを接続する。万全の状態であれば【トランシエ】を使用した方が繊細な作業は出来るのだが、今の所不安要素の大きさが無視出来ない為に、やむなく【アトラスト】を使用していた。

「全く、無茶言ってくれるよな……っつと」

本来ならば消火に用いられるはずの車輻を分解し、ポンプ部分だけを調達。ホースの長さが足りないが、そこは予備パーツの中からエネルギー系に使うであろう適当なチューブを見繕い、溶接する事で、何とか実用に足る物となっていた。当然のように、『使える物を使わないでどうする』というシグルスと、『【リズイクス】の貴重な予備パーツをたかがポンプ如きにくれてやれるものか』という

ジエーンの意見が対立していたが、緊急事態という事でノーマン艦長がパーツ流用の指示を出す事で決着が付いた。

「準備完了。ポンプ起動、バルブはゆっくり開けてくれ」

マニピュレータでのハンドサインと共に、機体外部のスピーカーを使ってポンプを操作する整備士に指示を出す。視認しやすかろうと思ったのか、整備士はやや大仰な敬礼をもって答え、注水を開始する。

水はゆっくりと冷却部に戻っていく。冷却部に入れるには中途半端な量で給水は一旦止まる。コウが振り返ってみれば、どうやら1つ目のタンクが空になったようだ。ポンプの唸りもすぐに止まり、タンクの交換に整備士達が走り回る。

「何だか、こうして空調がそこそこ効いている所にいるのは、なあ……」

酷暑の下で汗を流しながら、働くと言うより闘っている整備士達に、コウは心の中で一言詫びを入れた。

全てのタンクが空になる。しかし、冷却部の状態を示すパネルには、未だに満水の表示は点灯しない。このまま起動すれば、冷却が不十分でオーバーヒートを起こし、今度は炉そのものにダメージが及んでしまうもなくなる可能性があるという事だ。

渋い表情でパネルを見つめるノーマンとシグルス。満水ではなくとも、少なくとも安全に炉を冷却する為にはあと数t程の冷却水が必要だ。しかし、そんな量を飲料水や艦内生活用水から捻出すれば、今度は乗員の身の健康が脅かされ、最大速度を出したとしても、砂漠を越える前に確実に艦内の水は干上がるだろう。

「艦長、どうする？ 【アルバトロス】を潰す覚悟で飛ぶか、付近のオアシスから手当たり次第に水をかき集めてくるか、選択肢はこの2つしかないぞ？」

あまり詳しいとは言えない地図を広げ、シグルスが問う。しかし、

めぼしい場所などそう簡単に見つかる物ではなく、シグルスの眉間にはますます縦皺が刻まれるばかりであった。

「それより、ずっと立ってる青いMS、どうするんですか？ こっちから何か呼びかけてない上に警戒してライフル向けちゃった事もありますけど、いい加減何時間もあのままだと流石に不気味ですよ」そこにアレックスが首を突っ込み、忘れかけていた目の前の問題を改めて突きつける。「ガルス」からは確かに生体反応も確認された。という事は、その機体のコクピットには、パイロットが収まっている事だろう。

「そうか、そういう事か」

ノーマンは閃いた。

彼に、そしてヴァルハラ隊にとってもやや危険な賭けにはなるが、勝てばこちらの被害や労力も最小限に抑えつつ、水を確保出来るかも知れない。だが、ここで好機を逃せば、ジリ貧となって自滅を待つのみである。何か打てる手があれば、打たねばならない。

しかしそれは、与えられた任務を放棄する事にも繋がる。任務放棄ばかりか、最悪の場合には報告書偽造はおろか内通反逆等の疑いをかけられる可能性も捨て切れない。

「シグルス、何か長い金属パイプは無いか？ 一時的に使うだけいい。それと、少尉は今すぐに食堂に向かい、白のテーブルクロスを借りてきてくれ。なるべく大き目のものを頼む」

その言葉と一緒にパネルを覗き込んでいた2人は頷き、それぞれ頼まれた品を探しに行く。

つまり、ノーマンは白旗を作ろうと言うのだ。

白旗には、3つの種類がある。

社会主義、共産主義を理想とする、いわゆる赤軍に対して、反共産主義の勢力、白軍の掲げる旗。

戦意を維持せず、降伏する事を相手に知らせる旗。

そして、相手に対して敵意の無い事を示す為の旗。

ローマンが考えたのは3つ目の意味の旗であった。既にライフルを突きつけておいて何だと言われる可能性も捨て切れないが、やるだけはやってみなければどうなるかなど分からない。それに、ここは砂漠だ。ローマンの頭の中には、切り札が1枚だけは存在していた。

「取り敢えず、完成しました。こんな感じでいいですかね？」

【アルバトロス】のカタパルト・デッキの上で、パイプに真っ白なテールクロスが結び付けられ、MSがマニピュレータに持つには調度良いサイズの白旗が出来上がる。それを、給水作業の時から引き続きコウが乗る【アトラス】が拾い上げ、軽く振ってみる。

「よし、こんな物か」

満足そうに頷くローマンと、不安げにそれを眺めるアレックス。まだ若い彼には、ローマンの意図は到底読み切れるものではない。

シグルスとコウは、このような事態になる事を薄々感付いていたのか、あまり動揺した様子は無い。それでも、ネオ・ジオン製と思われる機体の下に赴くのは、多少なりとも危険が伴うであろう事を意識しているのか、その表情は緊張に満ちていた。

「ウラキ大尉、ここは1つ頼むぞ。この博打がどうしようもなくなってしまうえば、俺達はここで暮らす羽目になるのだから」

愛用のスパナを御守代わりに懐にしまい、シグルスが声をかける。彼もローマンと共に【ガルスI】の下へ向かうのだが、その足になるのはコウの【アトラス】だ。そして、有事の際には実力をもって危機を回避する為の保険でもある。車輛ではなく、敢えて【アトラス】での移動を選択したのには、こういった意味が多分に込められている。

「さて、行くでしょうかね？」

ローマンの号令で、【アトラス】のマニピュレータがデッキまで下げられる。シグルスとローマンはそれに乗り、砂漠の中へと発進していった。

第15話：静かなる戦い

艦長席に座り、宇宙を駆けていると分からなくなるものだが、人間はその2本の脚で歩く時に、己がいかに微細な存在であるかを母なる大地から教えられる。己の成す事が正しいか否かは、全て大地が教えてくれる。

しかし、今この砂漠からは、砂を踏みしめる感触以外には何も感じない。

私は、正しいのか？

私は、間違っているのか？

その二者択一に結論を出せぬまま、ノーマンは一歩、また一歩と進む。

MSとは、ここまで大きな物だったろうか。足を踏み出す度にその存在感が増大していく、目の前にそびえ立つ蒼の巨人。四半世紀も前にその産声を上げ、以降の永き戦場に主力として君臨し続ける、人型機動兵器。全高20m程の【ガルスI】は何も語らないが、しかしその圧倒的な存在感をそのまま重圧に変換して容赦なくノーマンに叩き付けて来る。

呑まれたら負ける、と意識する頃には、既に膝が笑い、足の下のも感覚も薄れている。

しかし、だ。ノーマンの後ろにはコウの乗る【アトラスト】と、シングルスがいる。更に彼等の後ろには、【アルバトロス】とそのクルー達が待っている。不様な真似など、出来るはずがない。

喉の渇きは、この砂漠の暑さだけが理由ではない。生唾を飲み込み、多少広くなって来た額に浮き出る汗を拭い、制帽を被り直す。そしてまた一歩、足を踏み出す。

熱砂に灼かれた空気は揺らぎ、蒼いMSの後ろに控える小さな集落をまるで蜃気楼のように見せている。あれが、本来ならば自らの手で破壊すべきだった物。手を伸ばせば届くような距離にあったも

そうとは信じ切れず、ノーマンは鼻で軽く息を吐く。

今にも消えて無くなってしまいそうな陽炎の街から、目の前にしつかりと聳え立つ【ガルスシ】に視線を移す。

『ごきげんよう、連邦軍の艦長殿。このような砂漠の辺境で如何された？』

【ガルスシ】の機外スピーカーから声が響く。平時ならば当たり障りの無い挨拶に聞こえるこの言葉でも、状況が状況だけに過敏に反応して警戒してしまう。しかし、敵を前にしながら着陸し、主機を止めると言う暴挙と言っても過言ではない行為には、恐らく相手も戸惑っている事だろう。まずは互いに腹の探り合いとして、軽いジャブが入れられたに過ぎない。

ならばこちらも極端なガードを固める事は無い。同じ様に少し気楽に、軽くいなしてやればいいだけだ。

「いえ、多少面倒な事に見舞われているだけでしてね。そちらこそ、この炎天下の中で旧ネオジオン製の6年前のMSなぞに乗られて何をしておられるのでしょうか？」

声色は、いつもの通り。自分の土俵で戦えるとはあまり思ってもいなかったが、相手に主導権を握らせるわけにも行くまい。独りで挑む戦いはMSパイロットだけの物ではないのだという事を、ノーマンは改めて知るのだった。

「全く、あの人らしいと言えばらしいんだが、もう少し安全な作戦は無かったのかなあ」

戦闘管制所に詰め込まれ、いつもは顔を見る事のない副長 ベンジャミン・オニール大尉が、今回は珍しくブリッジに上がって来ている。艦長であるノーマンが艦外へ行ってしまっている為だ。

閉じているのか開いているのかよく分からないような細い優しそうな目は、今は【ガルスシ】の方へ向かう艦長に向けられている。

「ミノフスキー粒子は薄めですから、頑張ればミサイルの1発や2発くらいは奴にぶつけられるかも知れませんがね」

軽くコンソールを弄りながら周囲の状況を確かめ、オペレーター
エルザ・ヴリューゲル伍長が冗談を放ち、即座に相方であるチャールズ・ステイグロ軍曹に頭を叩かれる。艦橋構造物の真下に位置する戦闘管制所に詰め掛けている索敵士や砲撃手にでも聞かれれば、血気盛んな彼等はすぐにもミサイルの誘導装置に目標のデータを送信し、トリガーに指を置いて発射の準備に取り掛かってしまう事だろう。外から見れば『上から2番目』に見えるこの通常ブリッジからあまり使われる事の無い戦闘ブリッジを経由して戦闘管制所に行くには時間がかかり、制止は難しい。

「静かに。……そろそろ始まるぞ」

ここまでヘッドセットとコンソールに全神経を傾けてきた通信士レナード・エヴァンス曹長が声を上げる。事前にノーマンの制服に仕込んでおいた盗聴器が、MSのコクピットハッチが開放される音を捉えた為だ。

『ソーラー発電とは違って、こいつのジェネレーターは安定して大出力を供給出来ます。それに、私の家はエアコンが壊れていましたね』

来た、と小さく声上がる。ブリッジ内のスピーカに直結された回線は、ラルフの声を忠実に拾ってクルーに届けている。聞き流すだけならただ優しい声に聞こえるが、しかし注意分深く聞いてみればそうではない事が分かる。流石、10年以上に渡って無用な戦いや損害を出す事無く集団を統率して来ただけの事はあるというか、それだけの貫禄に満ちている声だった。

『成程。確かに、MSのコクピットの空調はかなりの物らしいですからね』

納得したような声色で相手の言葉に答え、ノーマンは軽く息を吸い込む。一旦は引いた刃を、再び相手の下へと送り込む為だ。

『しかし、この機体を何故所持しているのでしょうか？ 我々の

アーカイブに登録されていないとなると、存在自体の少ない試作機や少数生産機、専用機という事になり、民間人にはなかなか手に入れ難い機体となるはずだと思いますがね」

「貴方方連邦軍が過去に殲滅した集落の格納庫に残っていましたね、それを拾って来ただけです」

「残念ながらアフリカの軍はフラストレーションが豊富でしてね、破壊出来る物は徹底的に破壊する。MSを丸ごと1機、完動品で残してやるほどお人好しじゃない」

お互い一気に言い切り、余った息が吐かれたか、溜息のような音の後、しばしの沈黙が訪れる。状況を直接見る事が出来ないだけにブリッジに走る緊張はかなりの物で、必然的にクルーの誰もが息を殺していた。

その静寂を破ったのは、やはりというか盗聴器の向こうの相手、ラルフだった。

「やはり、それほど甘くは行かないようですね。安心しましたよ」
安心。思いもかけない言葉が相手の口から出た事で、ブリッジの中は軽くざわめく。ラルフ自身は痛い所を突かれており、何も有利に使える条件が出たわけではないのだ。それなのに、こうしてリラックスしたような声色で言っただけ、軽く笑いまでこぼしている。

「一体、何が可笑しいと言うのだ。ラルフ・ヴィッツレーベン中佐」
低く唸るようなノーマンの声。ブリッジクルーには、それがノーマンの怒りを表す物だと言う事が理解出来た。きっとノーマンの眉間には深い縦皺が刻まれている事だろう。

「可笑しいも何も……。貴方は話が出来る人のようで、じっくり対話してみたいと思っただけです」

間に誰も挟まずにね、と付け加え、ラルフはそこで言葉を切る。ブリッジを、本日何度目かの沈黙が包み、そして、それは小さな破壊音で途絶えた。

「これは……。面倒な事になった……。」

レナードは、砂の流れるようなノイズだけを延々垂れ流し盗聴器

の破壊された事を伝えるヘッドセットを外す。呟いた言葉は、ブリッジクルーの心中を的確に代弁していた。

「やっぱり駄目か……駄目だよな、普通」

「ねえ、おじさん。これももう直らないの？」

同じ頃、【アルバトロス】からは少し離れた場所では、1人の男性と1人の少女が災難に見舞われていた。

先程まで彼等の足として働いていたと思しきオフロードタイプの車は今はその動きを完全に止め、ボンネットを開いて灼ける様な日差しにエンジンを晒している。

「ああ、クソっ」

中身はお世辞にも充実しているとは言い難い工具箱いスパナを投げ込み、ボンネットを乱暴に閉じる。その男性の仕様に怯えたのか少女はびくりと体を震わせた。それを見てようやく男性は自身の苛立ちがあまりこの少女に良い影響を与えていない事に気づき、すまん、と小さな声で詫びを入れる。

「MSは今が無いしね……取りに行くとしても、直線距離で20kmちよつと。幾ら何でも遠いよ」

辛うじて生きていたナビゲーションシステムを起動させてみれば、現在地よりかなり遠い所に赤い光点がある。しかしこの道程の途中には砂丘や流砂等の障害物もあり、結局は遠回りをして30km程と言った所か。とにかく、徒歩で向かうにはあまりに非現実的な数字である事は確かだった。

「まあ、アレがあるうがなかるうが、俺はどつちでもいいけど……コレが動かない事には、なあ？」

爪先で軽く車を蹴飛ばす男性。しかし何の偶然か、その蹴りを食らった車は今一度その身を振動させ、エンジンは息を吹き返した。

動いた、と少女は目を輝かせ、早くしないとまたエンジンが止まるとでも言わんばかりに急いでその助手席に乗り込む。

「アノー、早く早く！ MSを取りに行つて、ラルフの所に行かないきゃ！」

「ああ……そうだな。そうと決まれば、とつと行くとしますか」

アノーと呼ばれた男性も車に乗り込み、アクセルを踏み込む。先程まで死に体だった車はしっかりと砂ばかりの地面を捉えてタイヤの回転を推進力に変え、颯爽と走り去つて行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6889h/>

機動戦士ガンダム record of VALHALLA

2011年9月11日23時16分発行